

柿田西遺跡発掘調査報告書

二〇一九

岐阜県可児市教育委員会

2019

岐阜県 可児市教育委員会

柿田西遺跡発掘調査報告書

2019

岐阜県 可児市教育委員会

例 言

1. 本書は、岐阜県可児市柿田地内にある柿田遺跡及び柿田西遺跡における試掘調査の報告書である。
2. 本調査は、土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査を目的として、可児市教育委員会 の指導のもと株式会社イビソクが実施した。
3. 調査期間及び調査組織は下記の通りである。

| 調査期間 | 整理期間 |
|------------------------|-----------------------|
| 平成29年10月25日～平成30年2月23日 | 平成30年6月27日～平成31年3月15日 |
| 調査組織 | |
| 教育長 | 電橋 義朗 |
| 教育委員会事務局長 | 長瀬 治義 |
| 文化財課長 | 川合 俊 |
| 文化財係長 | 松田 篤 |
| 歴史資産整備係長 | 千田 泰弘 |
| 主 査 | 長沼 毅 |
| 主 査 | 牛田 千穂 |
| 主 任 | 長江 真和（調査担当） |
| 主 事 | 織田 真琴 |

4. 調査参加者は以下の通りである。
小栗敦 川島修 後藤重信 柴田由美 多和田洋子 西田まゆみ 古川一美 堀木彰
武藤淳司 横山美代江
5. 本書の執筆は、第1章、第2章第1節、第5章を長江真和（可児市教育委員会）、第2章第2節、第3章遺構を山崎貴之（株式会社イビソク）、第3章遺物を鈴木英美（株式会社イビソク）、第4章第1節を小林克也（株式会社パレオ・ラボ）、第4章第2節をバングリ スダグジャン・佐々木由香（株式会社パレオ・ラボ）が執筆し、全体の編集は長江真和、濱村友美（株式会社イビソク）が行った。
6. 発掘作業における現場管理、掘削、測量、写真撮影などの支援業務と、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は株式会社イビソクに、自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。
7. 遺物の図面及び写真は、口縁部や底部など土器の特徴が分かるものを選別して掲載し、小片は掲載していない。
8. 現地調査及び整理作業の過程で、下記の各氏及び各機関に多大なるご指導とご協力を賜ったことを深く感謝する。（敬称・肩書略・五十音順）。
赤塚次郎、小野木学、株式会社センサー
9. 本書に掲載した出土遺物、図面、写真は、すべて可児市教育委員会（可児市郷土歴史館および収蔵庫）で保管している。

凡 例

1. 本書における土色は、『新版標準土色帖』2006年度版を使用した。
2. 本書の水準高は、東京湾平均海面（T. P.）を使用している。なお、座標は国土座標Ⅶ系に基づく数値である。
3. 遺構番号は各トレンチ面の番号を頭一桁に「T」を付し、検出順に通し番号を割り当てた。その後、編集段階で遺構の性格を付与して表記した。
4. 遺構種別の略記号は、NR：自然流路、SA：杭列、SD：溝、SK：土坑、SP：ピット、SW：水制遺構、SX：不明遺構とした。
5. 遺物図版の縮尺は1/3、1/6である。
6. 遺物実測図中の一点破線は施軸の範囲、破線は接合痕を示す。
7. 遺物観察表中の（ ）の数値は復元値や残存値を示す。
8. 遺物番号は、本文、遺物観察表、図版、写真図版の全てに共通する。
9. 本書の写真図版の縮尺は任意である。

目 次

| | |
|------------------------|----|
| 第1章 自然的・歴史的環境 | 1 |
| 第2章 調査の経緯と経過 | 3 |
| 第1節 調査の経緯 | 3 |
| 第2節 調査の方法と経過 | 3 |
| 第3章 柿田西遺跡の調査概要 | 6 |
| 第4章 自然科学分析 | 72 |
| 第1節 柿田西遺跡出土木製品・木材の樹種同定 | 72 |
| 第2節 柿田西遺跡出土の大型植物遺体 | 76 |
| 第5章 総括 | 80 |

図 版 目 次

| | | | | | |
|------|-----------------|----|------|-------------------|----|
| 図 1 | 周辺遺跡地図 | 2 | 図 40 | T-30 平面図・断面図 | 53 |
| 図 2 | トレンチ配置図 | 5 | 図 41 | T-26～30 出土遺物 | 54 |
| 図 3 | T-1 平面図・断面図 | 7 | 図 42 | T-31 平面図・断面図 | 56 |
| 図 4 | T-2 平面図・断面図 | 8 | 図 43 | T-32 平面図・断面図 | 58 |
| 図 5 | T-3 平面図・断面図 | 9 | 図 44 | T-33 平面図・断面図 | 59 |
| 図 6 | T-4 平面図・断面図 | 11 | 図 45 | T-34 平面図・断面図 | 61 |
| 図 7 | T-5 平面図・断面図 | 12 | 図 46 | T-35 平面図・断面図 | 62 |
| 図 8 | T-1～5 出土遺物 | 13 | 図 47 | T-31～35 出土遺物 | 63 |
| 図 9 | T-6 平面図・断面図 | 15 | 図 48 | T-36 平面図・断面図 | 64 |
| 図 10 | T-8 平面図・断面図 | 16 | 図 49 | T-37 平面図・断面図 | 66 |
| 図 11 | T-8 個別平面図・断面図 | 17 | 図 50 | T-38 平面図・断面図 | 67 |
| 図 12 | T-9 平面図・断面図 | 18 | 図 51 | T-39 平面図・断面図 | 68 |
| 図 13 | T-10 平面図・断面図 | 20 | 図 52 | T-40 平面図・断面図 | 70 |
| 図 14 | T-10 出土状況図・断面図 | 21 | 図 53 | T-37～40 出土遺物 | 71 |
| 図 15 | T-6・8・10 出土遺物 | 22 | 図 54 | 木製品・木材の光学顕微鏡写真(1) | 74 |
| 図 16 | T-11 平面図・断面図 | 24 | 図 55 | 木製品・木材の光学顕微鏡写真(2) | 75 |
| 図 17 | T-12 平面図・断面図 | 25 | 図 56 | 大型植物遺体 | 79 |
| 図 18 | T-13 平面図・断面図 | 26 | 図 57 | 調査から判明した遺跡の範囲 | 81 |
| 図 19 | T-14 平面図・断面図 | 26 | | | |
| 図 20 | T-15 平面図・断面図 | 28 | | | |
| 図 21 | T-16 平面図・断面図 | 29 | | | |
| 図 22 | T-16 出土状況図・断面図 | 30 | | | |
| 図 23 | T-12・15・16 出土遺物 | 31 | | | |
| 図 24 | T-16 出土遺物 | 32 | | | |
| 図 25 | T-17 平面図・断面図 | 35 | | | |
| 図 26 | T-18 平面図・断面図 | 36 | | | |
| 図 27 | T-19 平面図・断面図 | 37 | | | |
| 図 28 | T-20 平面図・断面図 | 39 | | | |
| 図 29 | T-17～20 出土遺物 | 40 | | | |
| 図 30 | T-21 平面図・断面図 | 42 | | | |
| 図 31 | T-21 個別平面図・断面図 | 43 | | | |
| 図 32 | T-22 平面図・断面図 | 44 | | | |
| 図 33 | T-21～23・25 出土遺物 | 45 | | | |
| 図 34 | T-24 平面図・断面図 | 47 | | | |
| 図 35 | T-25 平面図・断面図 | 47 | | | |
| 図 36 | T-26 平面図・断面図 | 48 | | | |
| 図 37 | T-27 平面図・断面図 | 49 | | | |
| 図 38 | T-28 平面図・断面図 | 51 | | | |
| 図 39 | T-29 平面図・断面図 | 52 | | | |

表 目 次

| | | |
|-----|-----------------|----|
| 表 1 | 木製品・木材の樹種同定結果一覧 | 72 |
| 表 2 | 大型植物遺体 | 76 |
| 表 3 | モモ核の大きさ | 77 |

写真図版目次

- | | | | | | |
|------|------|-------------------|------|------|------------------|
| 図版 1 | T-1 | トレンチ土層断面 (北西から) | 図版 5 | T-26 | SX2土層断面 (西から) |
| | T-2 | トレンチ土層断面 (北西から) | | T-27 | SX1土層断面 (西から) |
| | T-3 | トレンチ土層断面 (北西から) | | T-28 | SD1遺物出土状況 (北西から) |
| | T-4 | SK1遺物出土状況 (西から) | | T-29 | トレンチ土層断面 (北西から) |
| | T-5 | SP1遺物出土状況 (西から) | | T-30 | SD1土層断面 (西から) |
| | T-6 | SD1土層断面 (西から) | | T-31 | SD2完掘状況 (西から) |
| | T-8 | SD1遺物出土状況 (北西から) | | T-33 | SD1土層断面 (西から) |
| | T-8 | SD1完掘状況 (北西から) | | T-33 | SX1土層断面 (西から) |
| 図版 2 | T-9 | NR1遺物出土状況 (南西から) | 図版 6 | T-34 | SX1土層断面 (西から) |
| | T-10 | SD1遺物出土状況 (北西から) | | T-35 | SX1土層断面 (南西から) |
| | T-10 | SD1遺物出土状況 (北東から) | | T-36 | SA1土層断面 (西から) |
| | T-10 | SX1完掘状況 (西から) | | T-36 | SW1土層断面 (西から) |
| | T-11 | SX1土層断面 (西から) | | T-37 | SX1土層断面 (西から) |
| | T-12 | トレンチ土層断面 (北西から) | | T-38 | トレンチ土層断面 (南西から) |
| | T-13 | トレンチ土層断面 (南西から) | | T-39 | NR1土層断面 (南西から) |
| | T-14 | トレンチ土層断面 (南西から) | | T-40 | SD1土層断面 (西から) |
| 図版 3 | T-15 | SX1土層断面 (西から) | 図版 7 | | 出土遺物1 |
| | T-16 | SD1遺物出土状況 (南東から) | 図版 8 | | 出土遺物2 |
| | T-16 | SD2遺物出土状況 (北西から) | | | |
| | T-16 | SD2遺物出土状況 (南東から) | | | |
| | T-18 | SX1土層断面 (西から) | | | |
| | T-19 | SD1土層断面 (西から) | | | |
| | T-19 | SD2土層断面 (西から) | | | |
| | T-20 | SD1土層断面 (西から) | | | |
| 図版 4 | T-20 | SW1土層断面 (西から) | | | |
| | T-20 | SX1土層断面 (西から) | | | |
| | T-21 | SW1・NR1土層断面 (西から) | | | |
| | T-21 | SX2土層断面 (西から) | | | |
| | T-23 | トレンチ土層断面 (南西から) | | | |
| | T-24 | トレンチ土層断面 (南西から) | | | |
| | T-25 | トレンチ土層断面 (南西から) | | | |
| | T-26 | トレンチ土層断面 (西から) | | | |

第1章 自然的・歴史的環境

柿田西遺跡は、可児川より形成された沖積平野上及び遺跡の南側に展開する浅間丘陵地の扇状地上に位置する。遺跡付近は可児川が枯れ、過去に数回氾濫し、その度に河道が変化している。遺跡周辺には集落遺跡、墳墓、古墳、古代寺院、城館跡などが見られる。

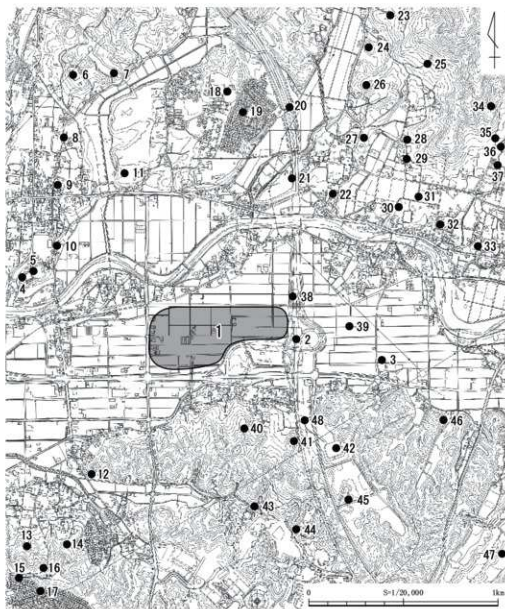
柿田遺跡(2)は、弥生時代中期の水田跡や古墳時代から室町時代までの堰や堤防跡、奈良時代の道路遺構、鎌倉時代の館跡、室町時代の条理地割に規制された水田跡などの遺構がみられ、約40万点の土器や約2万点の木製品が出土した集落跡である。また、柿田遺跡は可児市教育委員会が行った道の駅建設地点や馬乗洞地点等でも遺構が見つかり、広範囲にわたっていると想定される。柿田月田遺跡(3)は調査では住居跡や水制遺構は検出されなかったが、古墳時代前半の自然流路が検出された。金ヶ崎遺跡(21)は、古代の住居跡、掘立柱建物跡のほか、弥生時代末～古墳時代初頭の堅穴住居跡や方形周溝墓、前方後方形周溝墓、中世墓群が見つかった。特に弥生時代末～古墳時代の墓では多孔銅鏃、玉類など豊富な副葬品が見つまっている。顔戸南遺跡(38)は、近接する柿田遺跡との関連性がある遺跡であり、古墳時代では水田と集落跡、古代～中世は条里地割に伴う道路状遺構と水田、集落跡がみつかり、溝や自然流路から大量の土器とともに木製品が出土している。

墳墓では弥生時代末～古墳時代初頭の先述した金ヶ崎遺跡がみられ、その後、東寺山1号墳(4)、東寺山2号墳(5)、高倉山古墳(11)と3基の前方後方墳が築かれる。東寺山1号墳は墳長41mを測り、埋葬部から仿製四神四獣鏃や銅鏃が出土している。東寺山2号墳は墳長約58mを測り、二段築成である。高倉山古墳は墳長41.5mで、後方部の高さは約4m、前方部の高さは約1.2mを測る。埋葬施設、出土遺物、段築や葺石の有無など不明な部分が多い。これら3基の伏見古墳群は高倉山古墳、東寺山1号墳、東寺山2号墳と首長系列がたどれる。

そのほかはいずれも後期古墳である。神崎山古墳(12)は、堅穴系横式類似石室を有する直径約13mの円墳である。時期は6世紀前半で、埋葬施設から須恵器、鉄製品、玉類が出土している。また古墳の下からは弥生墳丘墓も見つまっている。巢元古墳(14)は、無袖式の横穴式石室を有する直径13.85mの円墳であり、須恵器や玉類が出土している。比衣丸山古墳(24)は墳丘の形状や規模などは不明であるが、無袖式の横穴式石室の中から6世紀前葉に比定される須恵器類をはじめ、土師器、玉類、鉄製品が出土している。坂本天神山古墳(27)は直径約25m、高さ約6mの巨岩を使った横穴式石室を有する大型円墳である。前山古墳群(41)で調査された前山2号墳は、古墳時代後期の横穴式石室を有する円墳であり、石室からは鉄製品、玉類、耳環、須恵器などが出土した。杉ヶ洞古墳群(42)は5基からなる古墳群で、1号墳、3号墳、5号墳が調査されている。横穴式石室から鉄製品や馬具、須恵器などが出土している。前方後方墳や円墳の他に山田横穴墓群(7)、青木横穴墓(20)のような横穴墓も築かれている。

窯跡では、須恵器を焼いた古墳時代の窯として馬乗洞古窯跡(45)がある。窯体の構造や規模等は不明であるが、黄褐色から赤褐色に焼けた坯身、坯蓋などが出土している。その他にも奈良・平安時代の窯跡があるがいずれも未調査である。

古代寺院である伏見廃寺(9)は、正確な所在地及び範囲確定はされていないが、想定される場所付近からは軒丸瓦や軒平瓦が採集されている。中世の城館跡であり、斎藤妙椿の隠居所と考えられる顔戸城跡(30)は、東西約180m、南北約150mの規模で、土塁や堀が良好に残されている。近世では未調査の柘の木経塚(46)がある。



| 番号 | 遺跡名(時代) | 番号 | 遺跡名(時代) | 番号 | 遺跡名(時代) |
|----|----------------|----|---------------|----|----------------|
| 1 | 柿田西遺跡(縄文～近代) | 17 | 大洞白山塚古墳(古墳) | 33 | 新木野古窯跡(平安) |
| 2 | 柿田遺跡(縄文～近代) | 18 | 念事ヶ平1～2号墳(古墳) | 34 | 恵観寺古墳群(古墳) |
| 3 | 柿田月田遺跡(古墳) | 19 | 稲荷山古墳群(古墳) | 35 | 庚申塚古墳(古墳) |
| 4 | 東寺山1号墳(古墳) | 20 | 青木横穴墓(古墳) | 36 | 大平山ノ上古墳(古墳) |
| 5 | 東寺山2号墳(古墳) | 21 | 金ヶ崎遺跡(弥生～近世) | 37 | 神宮古墳(古墳) |
| 6 | 新発知古墳群(古墳) | 22 | 比衣金ヶ崎古窯跡群(平安) | 38 | 顔戸南遺跡 |
| 7 | 山田横穴墓群(古墳) | 23 | 市洞古墳群(古墳) | 39 | 顔戸山ノ神遺跡(弥生・古墳) |
| 8 | 伏見白山神社古墳(古墳) | 24 | 比衣丸山古墳(古墳) | 40 | 柿田古墳(古墳) |
| 9 | 伏見庵寺(白鳳) | 25 | 打越古墳群(古墳) | 41 | 前山古墳群(古墳) |
| 10 | 伏見寺東古窯跡(奈良・平安) | 26 | 陣ヶ峰古墳群(古墳) | 42 | 杉ヶ洞古墳群(古墳) |
| 11 | 高倉山古墳(古墳) | 27 | 坂本天神山古墳(古墳) | 43 | 北ヶ洞2号墳(古墳) |
| 12 | 神崎山古墳(古墳) | 28 | 瀬訪神社古墳(古墳) | 44 | 北ヶ洞1号墳(古墳) |
| 13 | しんもじ塚古墳(古墳) | 29 | 坂本古墳群(古墳) | 45 | 馬栗洞古窯跡(古墳) |
| 14 | 黒元古墳(古墳) | 30 | 顔戸城跡(中世) | 46 | 稻之本経塚(近世) |
| 15 | 七ツ塚古墳群(古墳) | 31 | 花塚古墳(古墳) | 47 | 大寺寺南古墳(古墳) |
| 16 | 粘り塚古墳(古墳) | 32 | 顔戸藤塚古墳(古墳) | 48 | 柿田前山遺跡(古墳～中世) |

図1 周辺遺跡地図

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

可児市柿田地内において、約20haの区画整理事業が計画された。計画予定地は一部が周知の埋蔵文化財包蔵地である柿田遺跡の範囲内にあった。柿田遺跡は東海環状自動車道建設事業に伴って調査され、大規模な集落跡や水田跡、流路跡などが見つかっている。それらが東西に拡がっている可能性が考えられたため、西側にある計画予定地において、約1,600㎡の試掘調査を行い、遺構の有無と広がりを確認することとなった。

調査は、可児市教育委員会が株式会社イビソクの支援委託をうけ、平成29年10月25日から平成30年2月23日にかけて実施した。

調査の結果、柿田遺跡の範囲外の7地点において遺跡が確認された。これらの遺跡は柿田遺跡と距離が離れており関連性が不明瞭であるため、文化財保護法97条の手続きを行い、新たに柿田西遺跡A地点(21214-11960)、柿田西遺跡B地点(21214-11961)、柿田西遺跡C地点(21214-11962)、柿田西遺跡D地点(21214-11963)、柿田西遺跡E地点(21214-11964)、柿田西遺跡F地点(21214-11965)、柿田西遺跡G地点(21214-11966)とした。

第2節 調査の方法と経過

調査地点数及び調査面積は、1×40mのトレンチを40地点、計1,600㎡が対象となった。しかし、湧水による壁面崩落が著しいT-23は掘削を行ったが、土層の図化を行うことが出来なかった。また、T-7は未調査となり実質39地点で1,560㎡の調査となった。

トレンチの掘削は、まず重機により耕作土を掘削しながら地山面まで掘削し、遺構や遺物の有無を確認しながら遺構検出面まで掘り下げた。その後遺構検出および断面を記録する東側壁面の精査を人力で行った。そして遺構掘削、遺構および壁面土層の実測・写真撮影の順で作業を進めた。ただし、湧水による壁面崩落が著しかったT-22に限り西側壁面で記録作業を行った。トレンチからは近代以降に埋設された導水用の暗渠が検出されることが多々あり、暗渠部分は高台状に残し、掘削は行わなかった。遺構掘削は湧水が著しい場合、壁面崩落の危険性を考慮し、完掘せずに調査を終了した。遺物は、重機掘削時は一括で取り上げ、遺構内や出土した土層の明確なものについては、遺構・土層ごとに取り上げを行った。調査が終了したトレンチから埋め戻した。各トレンチの完掘時にはUAV(ドローン)を用いて全景撮影を行った。

現地調査に先立って、平成29年11月6日から資機材を搬入した。重機走路確認および基準点測量後、11月10日から重機によるトレンチ掘削を開始した。続いて、11月13日より作業員を雇用し、各トレンチの精査および遺構掘削を開始した。

特筆すべき成果として、12月4～12日にかけての調査を行ったT-8のSD1において、溝の底面から古墳時代の土師器・須恵器などがまとまって出土した。また並行して調査を進めていたT-10のSD1からは、人工的に横木を積み上げた木制遺構が検出された。さらに、12月14日から調査を行ったT-16からは、SD1・SD2の2条の溝が検出され、それぞれから弥生土器、木材が多量に出土した。

平成30年1月4日～2月8日にかけてT-20～29の掘削および調査を行い、1月20日～2月19日にかけてT-30～40の掘削および調査を行った。2月20日に現地完了検査が行なわれ、資機材の撤収など現場引き渡しの準備に入った。2月23日に借地駐車場の引き渡しをもって、すべての調査を完了した。

調査日誌抄録

平成29年（2017年）

- 11月6日～11月10日 資機材搬入、基準点および水準点測量、本調査開始
- 11月13日～11月15日 作業員人力掘削開始、仮設事務所搬入
- 12月4日～12月12日 T-8のSD1、T-10のSD1調査
- 12月14日～12月25日 T-16のSD1、SD2調査

平成30年（2018年）

- 1月4日～2月8日 T-20～T-29調査
- 1月20日～2月19日 T-30～T-40調査
- 2月20日～2月22日 現地完了検査 資機材撤収
仮設事務所回送
- 2月23日 借地駐車場引き渡し



平面測量



道構掘削



断面実測



写真撮影



図2 トレンチ配置図

第3章 柿田西遺跡の調査概要

今回の試掘調査で検出された遺構は、杭列（SA）2列・溝（SD）18条・自然流路（NR）12条・土坑（SK）1基・ピット（SP）1基・水制遺構（SW）5基・水田面2枚・不明遺構（SX）24基が検出された。遺構の総数は65基を数える。試掘調査のため検出した遺構全体の把握が難しく、遺構の性格や時期が判別困難な遺構を不明遺構（SX）と呼称した。なお、近代以降の導水用の暗渠が検出された区画はそれより下を掘削せず高台として残すこととなった。出土遺物は、土器や陶磁器、木製品などを中心に270コンテナケース6箱分が出土した。

T-1（図3・8）

耕作土から約1.8mの深さまで掘削を行ったが、検出面からの遺構・遺物は確認されなかった。

遺構外遺物 須恵器、山茶碗、陶磁器が出土した。山茶碗は東濃型と考えられる破片が含まれる。出土遺物はほとんどが細片で、時期は不明である。このうち陶器1点を図示した。1は近世の土鍋である。全体に錆軸を施し、体部は強く内湾する。口縁部には蓋受け部と蒲鉾型で中央に穿孔のある耳がつく。

T-2（図4・8）

耕作土から約1.2mの深さまで掘削を行った。地山付近から、流木が出土することから遺構が存在する可能性があるが、遺構検出面及び壁面土層観察において、遺構は確認されなかった。

遺構外遺物 土師器、須恵器、山茶碗、陶磁器が出土した。山茶碗は東濃型と考えられる破片が含まれる。出土遺物はほとんどが細片で、時期は不明である。出土遺物のうち山茶碗1点を図示した。2は碗である。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反し、端部は上方向にやや尖る。東濃型で第7型式に相当する。

T-3（図5・8）

耕作土から約0.5～0.8mの深さまで掘削を行ったが、検出面からの遺構・遺物は確認されなかった。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、陶磁器が出土した。山茶碗は、東濃型の第8型式と第11型式と考えられる破片が1点ずつ出土した。土師器と陶器はほとんどが細片で、時期は不明である。出土遺物のうち磁器1点を図示した。3は盃である。底部は平坦で削り出し高台がつき、高台は断面逆台形を呈する。体部外面下半はケズリにより面取りする。口縁部には単圏線、体部下半には二重圏線が廻る。圏線間に絵付けを施すが、摩滅が著しいため詳細は不明である。近世のものと思定される。

T-4（図6・8）

耕作土から約0.5～0.7mの深さでSK1、SX1を検出した。

SK1（8層） トレンチの中央で検出された土坑である。遺構の西側は調査区外のため全形は不明である。残存幅約1m、深さ約0.15mを測る。断面は半円状を呈し、埋土は鉄分を含んだ黒褐色粘質土が主体である。時期は遺物から古墳時代前期と思定される。

遺物は土師器と木製品が出土した。4は木製の櫛の肩部及び水掻き部である。半裁材を使用した一木式である。柄部から水掻き部へむかい緩やかに薄くなる。肩部はなで肩状で、水掻き部は隅丸

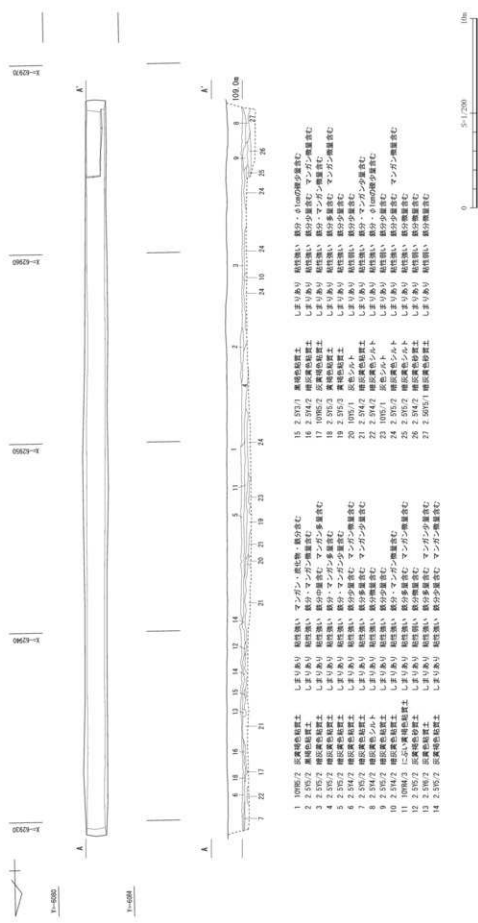


図3 T-1 平面図・断面図

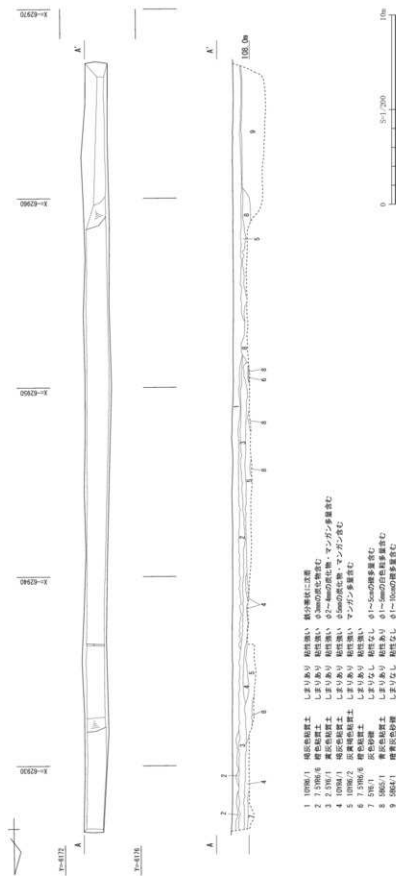


図 4 T-2 平面図・断面図

扇状をなす。木掻き部の断面形状は楕円形を呈する。

SX1 (3～4層) トレンチの北側で検出された、南東から北西方向に延びる遺構である。残存幅約1.1m、深さ約0.3mを測る。溝の北岸は調査区外のため全幅は不明である。埋土は2層に分けられ、上層は礫を含む砂質土、下層は粘質土である。時期は遺物から中世以降と想定される。

遺物は土師器、山茶碗、木製品が出土した。出土遺物はほとんどが細片のため、時期は不明である。このうち木製品1点を図示した。5は木杭である。丸木芯持材の半割材を使用している。先端は4方向から削る。上部柱部分は加工されておらず、わずかに表皮が残る。トレンチ内から溝が検出されることから護岸等に使用された可能性がある。

遺構外遺物 土師器、須恵器、山茶碗、陶器、木製品が出土した。山茶碗は東濃型が多数を占め、第3～5型式、第10・11型式と考えられる破片が含まれる。出土遺物はほとんどが細片で、時期は不明である。このうち3点を図示した。6は山茶碗の小皿である。墨書を確認できるが、部分的であるため、詳細は不明である。東濃型で第5型式に相当する。7は陶器の皿である。口縁部は強く外反し、端部で上方にわずかに立ちあがり側面に面をなす。口縁部に鉄軸を施す。8は建築部材か、2か所の釘孔をもち、線状圧痕が3か所確認される。

T-5 (図7・8)

耕作土から約0.5～0.6mの深さでSP1、SD1、SX1を検出した。

SP1 (3・4層) トレンチの北側で検出されたピットである。遺構東半分は調査区外のため全形は不明である。長軸0.61m、短軸0.39m、深さ0.08mを測る。平面形は不整形で、断面はすり鉢状を呈する。埋土は2層に分かれ、いずれも細砂層からなる。

時期は遺物から古墳時代前期と想定される。

SD1 (5～12層) トレンチの北側で検出された北東から南西方向に延びる溝である。幅約3.8m、深さ約0.5mを測る。溝の北岸は調査区外のため全幅は不明である。水流の方向は標高の高い北東から南西方向への流れが想定されるが範囲が狭いため不明である。埋土はシルトと砂質土を主体とする。溝の南側は土砂が交互に堆積することから、人為的に埋められた可能性がある。

遺物の出土は認められなかったが、隣接するSP1とほぼ同じ標高から検出されたことからSP1と同じく古墳時代前期の遺構であると推測される。

SX1 (21～23層) トレンチの北側で検出された遺構で、西側は調査区外のため全形は不明である。長軸0.82m、短軸0.22m、深さ0.28mを測る。断面は皿状を呈する。埋土は3層に分かれ、細砂を含む砂質土が主体である。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

遺構外遺物 土師器、須恵器、山茶碗、陶磁器が出土した。このうち3点を図示した。9・10は山茶碗の小皿である。9の体部は直線的に立ちあがり、口縁部外面はわずかに外反し、端部は外傾した面をなす。東濃型で第9型式に相当する。10は胎土が粗く、底部は平坦で器壁が厚い。尾張型で第8型式に相当する。11は磁器の皿小片である。底部は平坦で、内面に絵付けを施す。

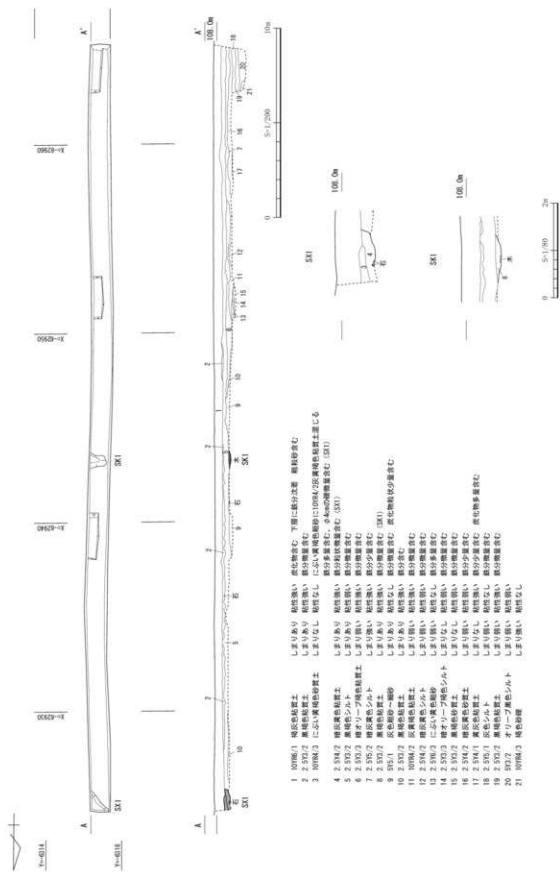
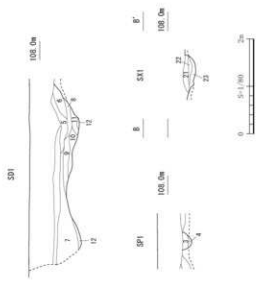
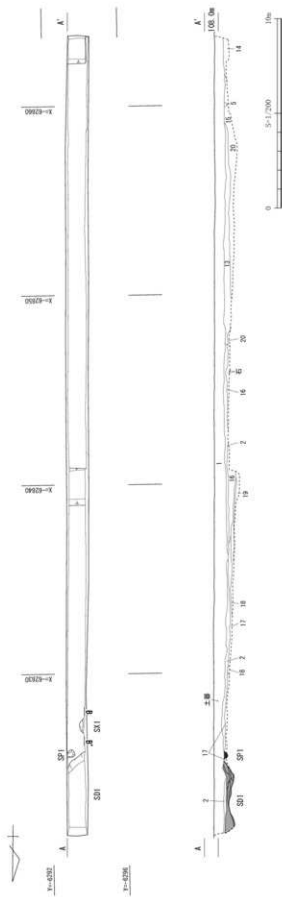
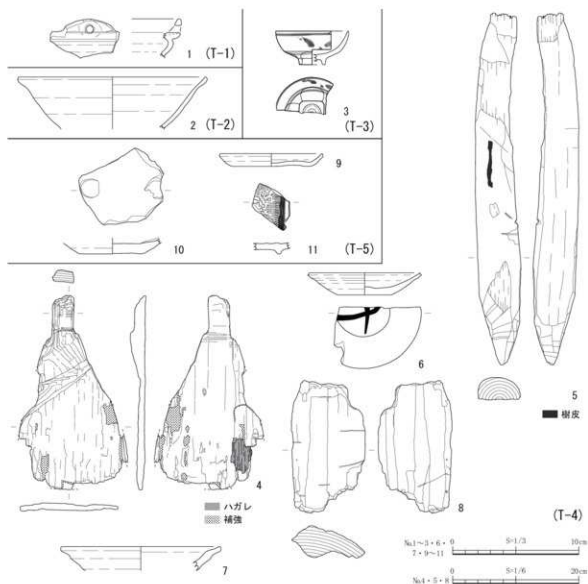


図 6 T-4 平面図・断面図



- 1 10765.1 暗灰色粘質土 粘り強い マンガン含有 下部に部分変型
- 2 2350.1 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン少量含有 下部に部分変型
- 3 2350.2 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン少量含有
- 4 2350.3 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン少量含有
- 5 2350.4 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン少量含有
- 6 2350.5 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン少量含有
- 7 2350.6 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン少量含有
- 8 2350.7 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン少量含有
- 9 2350.8 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン少量含有
- 10 2350.9 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン少量含有
- 11 2350.10 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン少量含有
- 12 10765.2 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン・炭化物・水片含有
- 13 2350.1 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン少量含有
- 14 2350.2 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン少量含有
- 15 2350.3 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン少量含有
- 16 2350.4 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン少量含有
- 17 2350.5 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン少量含有
- 18 2350.6 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン少量含有
- 19 10765.2 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン・炭化物・水片含有
- 20 10765.2 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン少量含有
- 21 2350.2 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン少量含有
- 22 2350.3 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン少量含有
- 23 2350.4 暗灰色粘質土 粘り強い 粘り強い マンガン少量含有

図7 T-5平面図・断面図



| 番号 | 写真 | 出土位置 | 遺構名 | 層位 | 種別 | 器種 | 法量(cm) | | | 成・整形調整 | 備考 |
|----|-----|------|-----|-----|-----|------|---------------|-------------|-------------|-----------------------------------|------------|
| | | | | | | | ※()内は復元値・残存値 | 口径 | 底径 | | |
| 1 | - | T-1 | 遺構外 | 表土 | 陶器 | 土鍋 | - | - | (3.1) | 耳全体にヘラナデと指オサエ痕 口縁部外面にロクロナデ | 耳に穿孔 |
| 2 | - | T-2 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 碗 | (14.6) | - | (4.2) | 全体にロクロナデ | |
| 3 | - | T-3 | 遺構外 | 6層 | 磁器 | 蓋 | (5.8) | (2.0) | 2.7 | 体部にケズリと面取り | 外面に染付を施す |
| 4 | 図版B | T-4 | SK1 | 8層 | 木製品 | 椀 | 長さ (30.8) | 幅 (17.2) | 2.4 | 使用痕 加工痕 | |
| 5 | - | T-4 | SK1 | 4層 | 木製品 | 杖 | 長さ 55.8 | 幅 6.8 | 厚さ 3.5 | 加工痕 | 表皮がわずかに残る |
| 6 | - | T-4 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 小品 | (8.8) | (4.0) | 1.8 | 全体にロクロナデ 底部外面に回転糸切り痕 | 底部外面に墨書 |
| 7 | - | T-4 | 遺構外 | 2層 | 陶器 | 皿 | (12.5) | - | (1.9) | 体部外面にケズリ 口縁部内外面と体部内面にロクロナ デ | 口縁部に鉄軸を施す |
| 8 | - | T-4 | 遺構外 | 20層 | 木製品 | 建築部材 | 長さ (21.0) | 幅 (11.6) | 厚さ (5.0) | | 釘孔1か所 |
| 9 | - | T-5 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 小品 | (8.0) | (6.2) | 1.0 | 全体にロクロナデ 底部外面に回転糸切り痕 | 内面に付着物 |
| 10 | - | T-5 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 小品 | - | 5.2 | (1.3) | 底部外面に回転糸切り痕 | 底部内面に重ね焼き痕 |
| 11 | - | T-5 | 遺構外 | 表土 | 磁器 | 皿 | - | - | 0.9 | | 染付 |

図8 T-1～5 出土遺物

T-6 (図9・15)

耕作土から約0.2～0.5mの深さでSD1、NR1を検出した。

SD1 (2～5層) トレンチの北側で検出された溝で、残存幅約13mを測り、検出面から約0.8m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。水流の方向は標高の高い北東から南西方向への流れが想定される。埋土は木片・炭化物など有機質を含む黒褐色粘質土を主体とする。溝掘削時に東西方向へ延びる木材が3本出土した。表面に人為的な加工痕が認められないことから流木と思われる。

遺物は土師器が出土したが、細片のため図示はできなかった。東側に隣接するT-8のSD1と埋土の特徴が類似することから、連続した同一遺構の可能性が想定され、同一遺構の場合古墳時代中期～後期と推定される。

NR1 (6～21層) トレンチの南側で検出された東西方向に延びる自然流路で、残存幅約15mを測り、検出面から約0.8m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。水流の方向は北東から南西方向への流れが想定される。埋土は粘質土、砂、シルトが交互に堆積する。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、陶磁器が出土した。土師器と陶磁器はほとんどが細片で、時期は不明である。山茶碗1点を図示した。12は小皿である。体部はやや内湾して立ちあがり、口縁端部はやや尖る。東濃型で第9型式に相当する。

T-8 (図10・11・15)

耕作土から約0.6～0.9mの深さでSD1・2、NR1、SW1を検出した。

SD1 (16～17層) トレンチの中央で検出された東西方向に延びる溝で、北岸がSD2を重複している。残存幅約5m、深さ0.6mを測る。水流の方向は標高の高い北東から南西への流れが想定される。断面は逆台形状を呈し、埋土は粗砂や木片を多く含む黒褐色粘質土が主体である。重複関係から、SD2埋没後に形成された溝であり、時期は遺物から時期は古墳時代中期～後期と推定される。

遺物は溝底面から土師器、須恵器が多量に出土した(図版1)。このうち4点を図示した。13～15は土師器である。13は甕である。頸部は外反して立ちあがり、口縁部中位でわずかに膨らむ。端部は強く外反し丸くおさめる。廻間Ⅱ式期に相当する。14は有段高坏である。坏部下半に垂下稜をもつ。宇田Ⅰ式期に相当する。15は台付甕である。台部はやや内湾してハの字にひらき、端部はわずかに折り返す。廻間Ⅲ式期に相当する。16は須恵器の甕である。肩部に張りはなく、頸部はくの字状にひらく。口縁端部は内面がへこみ、側面は内傾した面をなす。猿投窯産で6世紀中葉のものとする。

SD2 (18～20層) トレンチの北側で検出された東西方向に延びる溝で、南岸をSD1に重複される。残存幅約5mを測る。水流の方向は標高の高い北東から南西への流れが想定される。断面は逆台形状を呈し、埋土は径10cmの礫を多量に含んだ砂礫が主体である。また、土層断面の検討の結果、SD2に付随する盛土SW1が確認された。

遺物は土師器が出土しており、SD1との前後関係と遺物から古墳時代中期以前の溝と考えられる。

NR1 (5～13層) トレンチの南側で検出された東西方向に延びる自然流路である。残存幅約8mを測り、検出面から約0.8m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。水流の方向

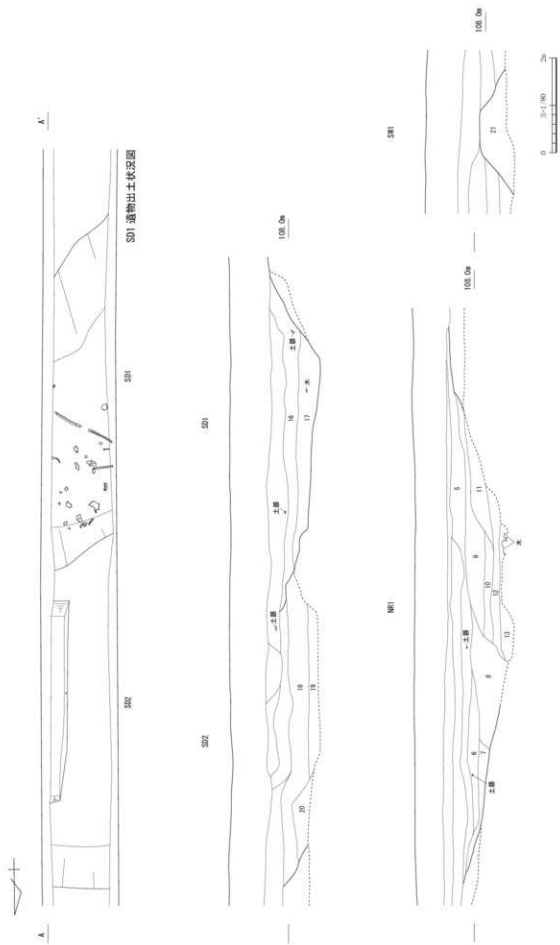


图 11 T-8 個別平面图・断面图

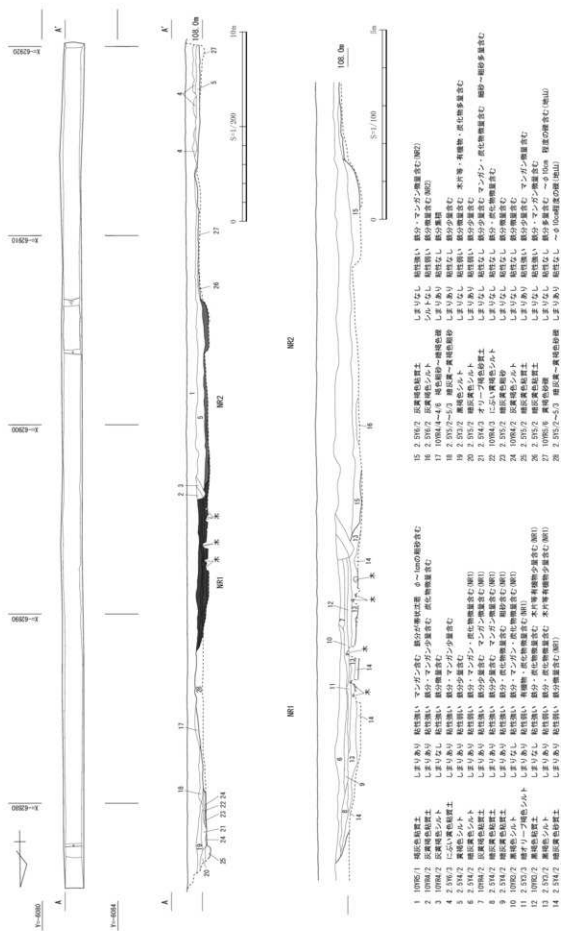


図 12 I-9 平面図・断面図

は標高の高い北東から南西方向への流れが想定される。埋土は粘質土やシルトが主体であり、流路掘削時に東西方向に延びる木材が2本出土した。表面に加工痕が見られないことから流木と考えられる。時期は遺物から近世以降と想定される。

遺物は土師器、須恵器、山茶碗、陶器、木製品が出土した。このうち2点を図示した。17は土師器の高坏である。透孔を3か所にもつ。廻間Ⅱ式期に相当する。18は杭である。先端の全周を鋭角に削り、上部は表面の摩滅が著しい。水制遺構の構成材と考えられる。

SW1 (21層) トレンチの北側で検出された盛土で、断面観察から蒲鉾状の粘質の強いシルトの盛り上がり確認された。全幅約2m、高さ約0.6mの規模を測り、SD2の北岸に構築されていることから、SD2に付随する遺構と考えられる。掘削時に杭や構成材等は確認されなかったが、SW1に隣接しSD2が掘り込まれることから溝の護岸施設であると判断した。

遺物の出土は認められなかったが、SD2に付随する遺構であるため古墳時代中期以前の遺構と考えられる。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、陶器が出土したがほとんどが細片で、時期は不明である。

T-9 (図12)

耕作土から約0.5～0.7mの深さでNR1・2を検出した。

NR1 (6～14層) トレンチの中央の東壁で確認した東西方向に延びる自然流路で、残存幅約10mを測り、検出面から約0.7m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。水流の方向は標高の高い北東から南西への流れが想定されるが、検出範囲が狭いため不明である。南岸をNR2と重複し、立ち上がりがみられないことから、NR2より後の時期である。埋土はマンガン・鉄分を含む粘質土が主体である。遺構掘削時に北東から南西に向けた木材が3本出土した。木材の直径は径5～10cmで表面に人為的な加工痕が見られないことから流木と考えられる。

流木以外の遺物の出土が認められなかったため、時期は不明である。

NR2 (15～16層) トレンチの中央の東壁面から確認された東西方向に延びる自然流路で、北岸をNR1と重複する。残存幅約10mを測り、検出面から約0.4m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。水流の方向は標高の高い北東から南西方向への流れが想定される。埋土は灰黄褐色シルト、粘質土の2層からなる。北岸は2・3層によって切られている。

遺物の出土が認められなかったため、時期は不明である。

遺構外遺物 山茶碗、陶磁器が出土したがほとんどが細片で、時期は不明である。

T-10 (図13・14・15)

耕作土から約0.5～0.6mの深さでSD1、SX1・2を検出した。

SD1 (9～19層) トレンチの北側で検出された東西方向に延びる溝で、残存幅約15mを測り、検出面から約0.5m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。北岸は調査区外のため全幅は不明である。水流の方向は標高の高い北東から南西への流れが想定されるが、検出範囲が狭いため不明である。埋土は黒褐色粘質土～砂質土が主体で、木片や粗砂、礫を多量に含む。溝の北側からは5本以上の横木が東西方向に向けて据えられている状況が確認できた。横木の表面に加工痕が認められないことから、自然木を積み上げて構築した水制遺構である可能性が高い。横木は調査区外へ延びているため今調査では取り上げず、現状維持のまま埋戻した。時期は遺物から古墳時代前期に想定される。

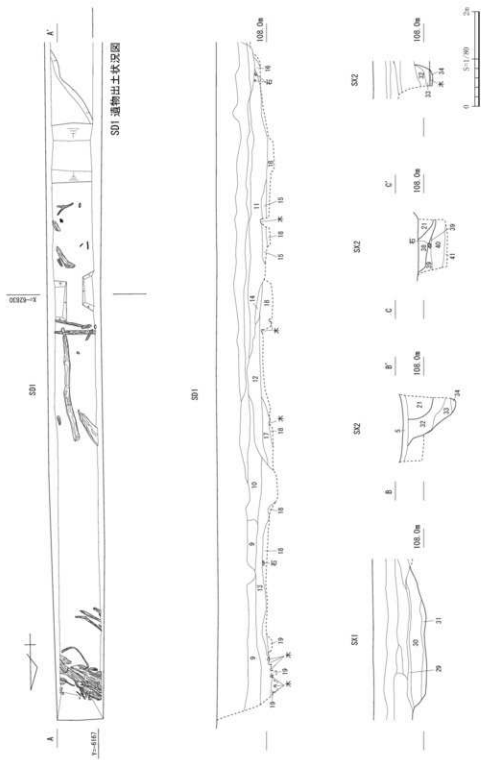
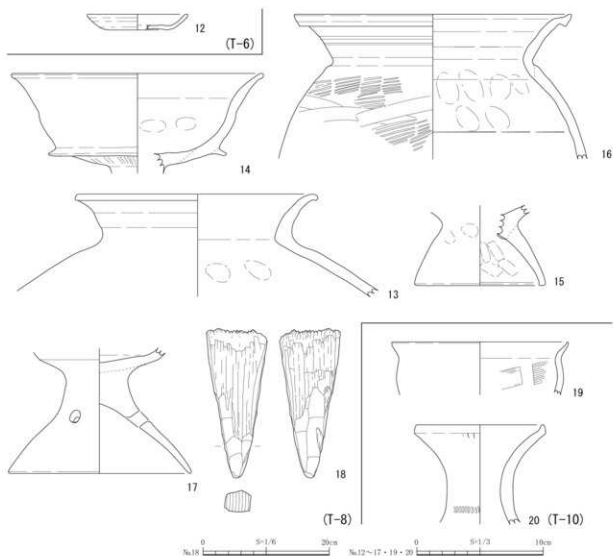


图 14 T-10 出土状况图·断面图



| 番号 | 写真 | 出土位置 | 遺構名 | 層位 | 種別 | 器種 | 法量 (cm) | | | 成・整形調整 | 備考 |
|----|-----|------|-----|-----|------|------|---------------|----------|-----------|---------------------------------------|-----------|
| | | | | | | | ※()内は復元値・残存値 | 口径 | 底径 | | |
| 12 | - | T-6 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 小皿 | (8.0) | (4.7) | 1.3 | 全体にロクロナデ 底部外面に回転糸切り痕 | |
| 13 | - | T-8 | SD1 | 17層 | 土師器 | 甕 | (18.8) | - | (8.2) | 体部外面から口縁部内外面にナデ 体部内面に指オサエ痕 | |
| 14 | 図庫7 | T-8 | SD1 | 17層 | 土師器 | 有段高杯 | (19.8) | - | (7.9) | 全体にヨコナデ 杯底部外面にヘラミガキ 体部内面指オサエ後ナデ | |
| 15 | - | T-8 | SD1 | 17層 | 土師器 | 台付甕 | - | (10.2) | (6.4) | 脚部外面にナデと指オサエ痕 脚部内面に板ナデ | |
| 16 | 図庫7 | T-8 | SD1 | 17層 | 須恵器 | 甕 | (21.8) | - | (11.5) | 体部外面にタタキ 内面に指オサエ痕 口縁部内外面にロクロナデ | |
| 17 | 図庫7 | T-8 | NR1 | 11層 | 土師器 | 高杯 | - | (14.4) | (10.0) | 脚部内面にナデ | 3方透 摩滅 |
| 18 | - | T-8 | NR1 | 7層 | 木製品 | 杭 | 長さ (23.7) | 幅 9.6 | 厚さ 3.4 | 加工痕 | 摩滅 |
| 19 | - | T-10 | SD1 | 18層 | 土師器 | 鉢 | (13.9) | - | (4.2) | 全体にナデ 体部内面にハケ目 | |
| 20 | - | T-10 | 遺構外 | 表土 | 弥生土器 | 甕 | (10.0) | - | (7.9) | 頸部下部に半截竹管文 口縁部外面にキザミ目 | 摩滅 |

図 15 T-6・8・10 出土遺物

遺物は土師器が出土した。このうち1点を図示した。19は土師器の鉢である。体部はゆるやかに内湾し、口縁端部は上方にややつまみあげられる。廻間Ⅱ式期～Ⅲ式期に相当する。

S X 1 (29～31層) トレンチの南側で検出された南北方向に延びる遺構で、南北方向に延び、幅約3m、深さ約0.4mを測る。断面は逆台形状を呈し、埋土はシルトが主体である。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

S X 2 (32～34・38層) トレンチの中央で検出された南北方向に蛇行して延びる遺構で、上端は21層（造成土）により削平される。残存幅約0.5m、深さ約0.3mを測り、長さ約5mにわたり検出された。埋土は砂質土が主体で、遺構底面付近は礫混り砂質土であった。

遺構底面からは流木が出土した。流木以外の遺物の出土が認められなかったため、時期は不明である。

遺構外遺物 弥生土器、土師器、山茶碗、陶磁器、石製品が出土した。このうち弥生土器1点を図示した。20は壺の口縁部である。頸部は細く外反し、外面に刺突半裁竹管文を施す。口縁端部は受口状を呈し、外面にキザミ目を施す。朝日式期または貝田町式期に相当する。

T-11 (図16)

耕作土から約0.4mの深さでS X 1を検出した。

S X 1 (7～11層) トレンチの南側で検出された東西方向に延びる遺構である。残存幅約2.3mを測り、検出面から約0.5m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。断面は逆台形状を呈し、埋土は細砂を含む粘質土が主体である。遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、陶磁器が出土したがほとんどが細片で、時期は不明である。

T-12 (図17・23)

耕作土から約0.7mの深さまで掘削を行ったが、東西方向へ延びる近代の暗渠が9本検出されたのみで、検出面からの遺構・遺物は確認できなかった。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、陶磁器が出土した。山茶碗は東濃型が多数を占める。土師器と陶磁器はほとんどが細片で、時期は不明である。このうち山茶碗1点を図示した。21は碗である。墨書を確認できるが、残存率が悪く詳細は不明である。体部下半は丸みをおびて立ちあがり、口縁端部は丸くおさめる。東濃型で第9型式に相当する。

T-13 (図18)

耕作土から1.5mの深さまで掘削を行ったが、東西方向へ延びる近代の暗渠が5本検出されたのみで、検出面からの遺構・遺物は確認できなかった。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、陶磁器が出土したがほとんどが細片で、時期は不明である。

T-14 (図19)

耕作土から約1.5mの深さまで掘削を行ったが、東西方向へ延びる近代の暗渠が1本検出されたのみで、検出面からの遺構・遺物は確認できなかった。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、陶磁器が出土したがほとんどが細片で、時期は不明である。

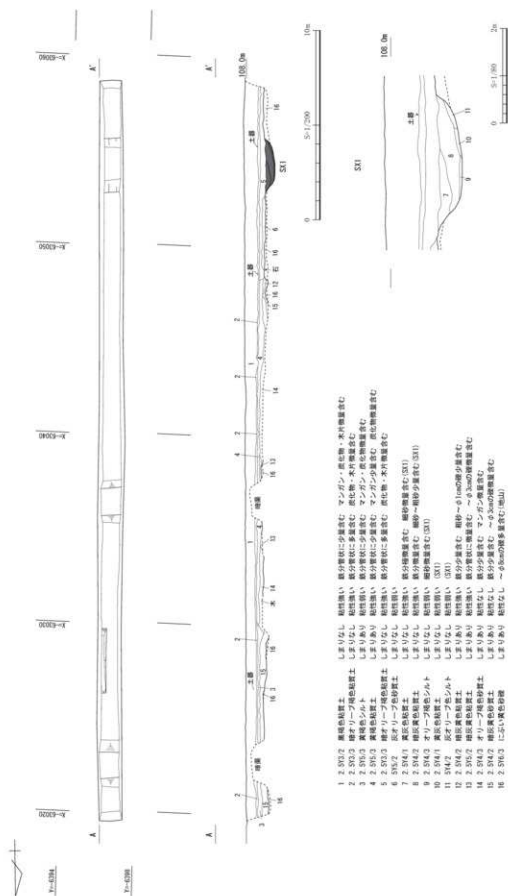


図 16 T-11 平面図・断面図

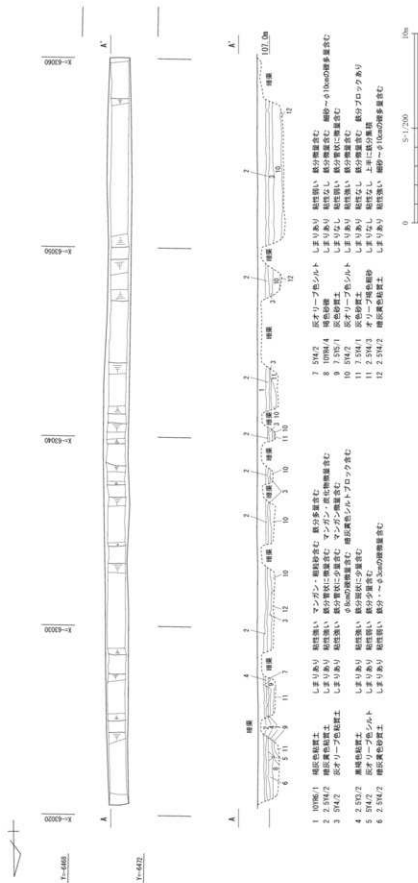


図 17 T-12 平面図・断面図

T-15 (図20・23)

耕作土から約0.4～0.9mの深さでNR1、SX1を検出した。

NR1 (9～10層) トレンチの中央やや南寄りで見出された自然流路で、南東から北西方向に延びる。残存幅約3.04m、深さ0.36mを測る。流路の南肩のみ検出され、北側は近代の暗渠に破壊されており全幅は不明である。埋土は木片・炭化物を含む灰色粘質土が主体である。遺構掘削時に木杭が1本出土した。水流の方向は、標高の高い南東から北西への流れが想定される。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

SX1 (6～8層) トレンチの南側で見出された東西方向に延びる遺構で、幅1.75m、深さ0.28mを測る。断面は逆台形状を呈し、埋土は木片・炭化物を含む黒褐色粘質土が主体である。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

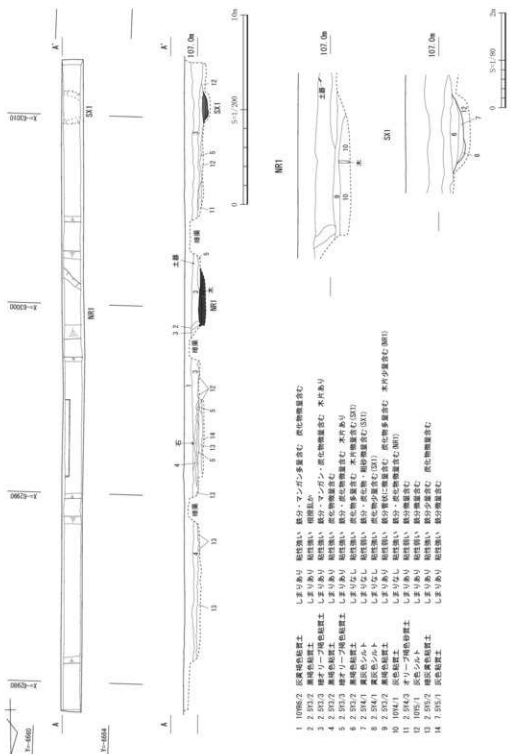
遺構外遺物 土師器、須恵器、山茶碗が出土した。山茶碗は中濃型と考えられる破片が多数を占めるが、時期は不明である。出土遺物のうち須恵器1点を図示した。22は瓶である。体部はわずかに内湾して立ちあがり、底部内面に自然釉がかかる。7世紀中葉のものと考えられる。

T-16 (図21～24)

耕作土から約0.7～0.8mの深さでSD1・2を検出した。

SD1 (10～15層) トレンチの中央で見出された溝で、南岸をビット状の落ち込み(7～9層)に重複される。SD2と並行して北東から南西方向に延びる。残存幅約1.38m、深さ0.8mを測り、溝北岸は近代の暗渠を残した高台のため全幅は不明である。埋土は木片・炭化物を含む粘質土が主体である。水流の方向は標高の高い北東から南西への流れが想定される。時期は遺物から古墳時代前期と想定される。

遺物は弥生土器と土師器が多数出土した(図版3)。このうち11点を図示した。23・24は弥生土器の甕である。23の口縁部は直線的にひらき、端部は丸くおさめる。外面にタールが付着する。残存率が悪く、時期は不明である。24は底部外面に布目痕、側面に棒状工具による条痕を施す。高蔵式期に相当する。25・28・29は土師器の甕である。25の口縁端部はわずかに上方につまみあげる。廻間I式期に相当する。28は体部外面にタテハケ、内面にヨコハケを施す。29は頸部にキザミ目を施す。口縁端部はわずかに折り返す。28・29は廻間I式期に相当する。26は土師器の台付甕で、台部はやや内湾気味にハの字にひらき、端部は丸くおさめる。廻間I式期に相当する。27は土師器の高坏である。円形の透孔を2か所確認できる。廻間I式期に相当する。30・31は土師器の壺である。30は肩部と頸部の境界外面に沈線を3条横位に巡らせ、外面にタテハケを施す。廻間I式期に相当する。31の口縁部は上面に刺突列点文、側面に凹線を4条巡らせる。廻間I式期に相当する。32・33は土師器の鉢である。32の口縁部はゆるやかに内湾し、端部はへこむ。口縁端部外面に凹線を2条横位に巡らせる。33は内外面全体にミガキを施す。口縁端部は外面に沈線を2条横位に巡らせる。いずれも廻間I式期に相当する。



- 1 1006.2 圧着褐色粘質土 粘性強い 粉分・マンガン多量含有 炭化物層を含む
- 2 2.501.2 黒褐色粘質土 しまりあり 粘性強い 粉分
- 3 2.501.3 暗オリーブ褐色粘質土 しまりあり 粘性強い 炭分・マンガン・炭化物層を含む 不片あり
- 4 2.501.2 黒褐色粘質土 しまりあり 粘性強い 炭化物層を含む
- 5 2.501.3 暗オリーブ褐色粘質土 しまりあり 粘性強い 炭分・炭化物層を含む 不片あり
- 6 2.501.2 黒褐色粘質土 しまりなし 粘性強い 炭化物多量を含む 不片微量を含む(SD)
- 7 2.501.1 黒褐色粘質土 しまりなし 粘性強い 炭分多量を含む 粗砂少量を含む(SD)
- 8 2.501.1 黒褐色粘質土 しまりあり 粘性強い 炭分少量を含む 炭化物層を含む
- 9 2.501.2 黒褐色粘質土 しまりあり 粘性強い 炭分少量を含む 炭化物層を含む 不片少量を含む(SD)
- 10 1004.1 灰色粘質土 しまりなし 粘性強い 炭分・炭化物層を含む
- 11 2.504.3 オリーブ褐色粘質土 しまりあり 粘性強い 炭分微量を含む
- 12 1005.1 灰色シルト しまりあり 粘性強い 炭分少量を含む
- 13 2.501.2 暗褐色粘質土 しまりあり 粘性強い 炭分微量を含む
- 14 2.501.1 灰色粘質土 しまりあり 粘性強い 炭分微量を含む

図 20 T-15 平面図・断面図

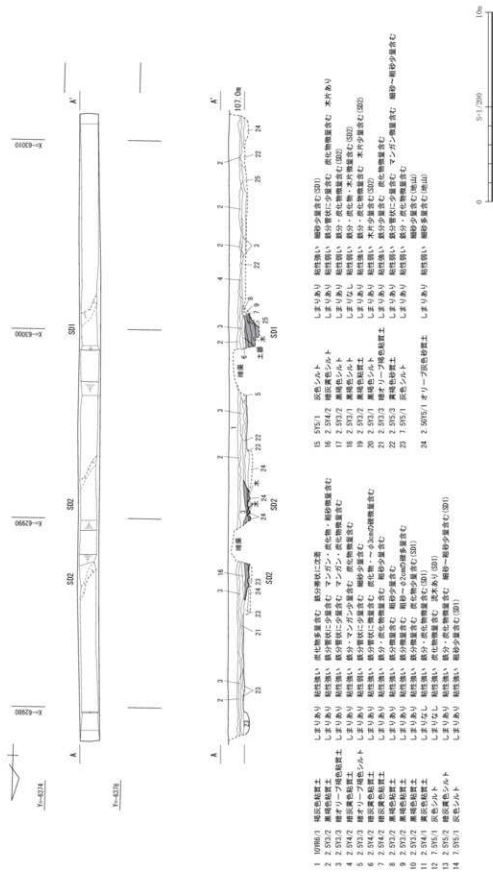


図 21 T-16 平面図・断面図

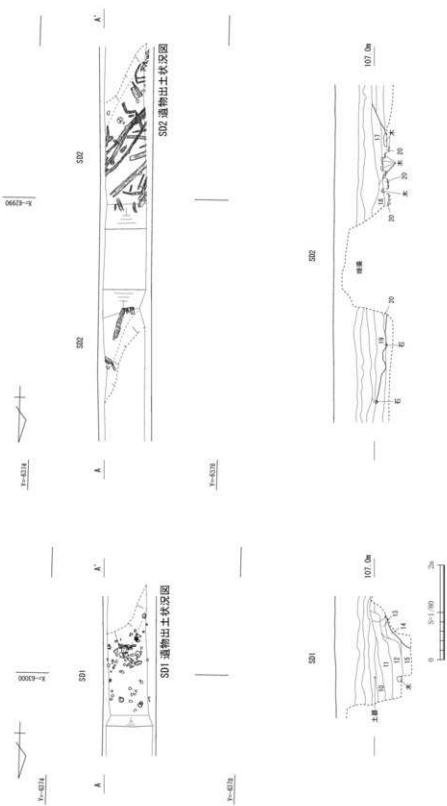


图 22 T-16 出土状況図・断面図

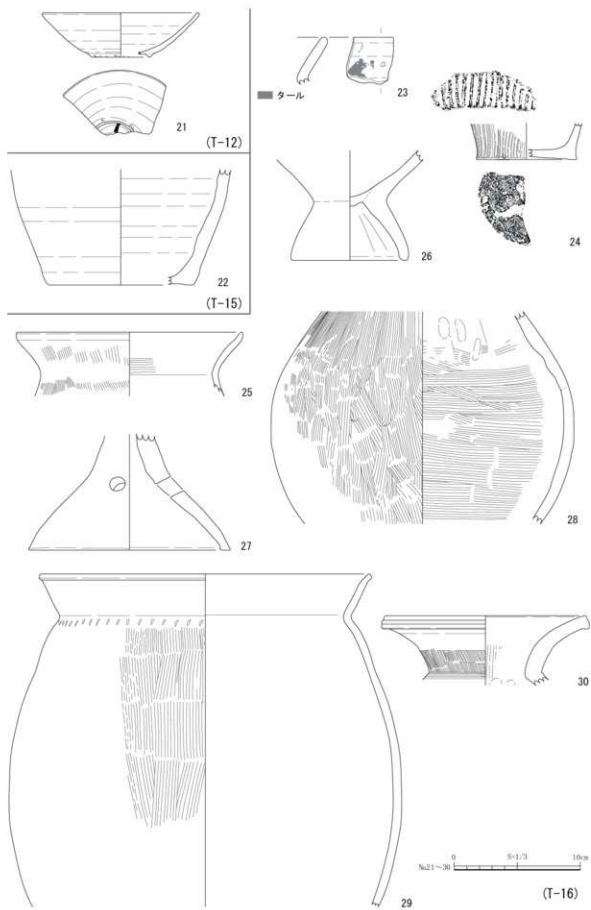


図 23 T-12・15・16 出土遺物

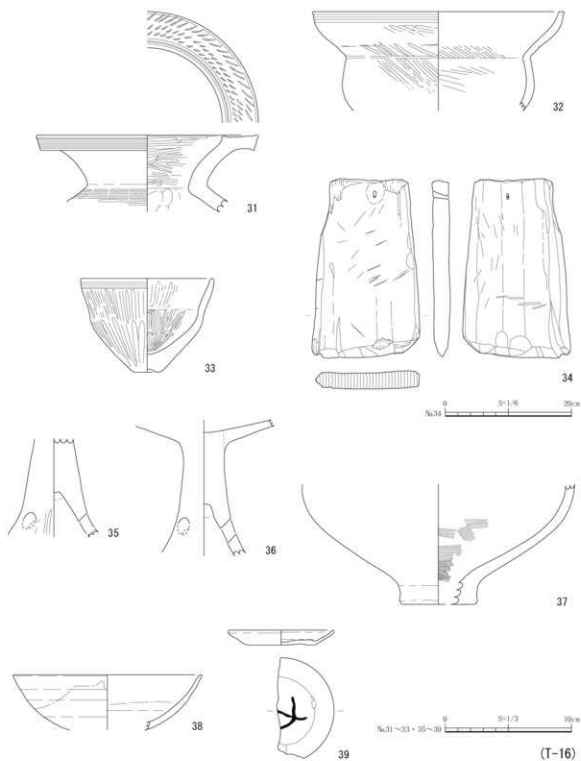


图 24 T-16 出土遺物

| 番号 | 写真 | 出土位置 | 遺構名 | 層位 | 種別 | 器種 | 法量(cm) | | | 成・整形調整 | 備考 |
|----|-----|------|-----|-----|------|------|---------------|-----------|-----------|--|-----------------------------------|
| | | | | | | | ※()内は復元値・残存値 | 口径 | 底径 | | |
| 21 | - | T-12 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 碗 | (12.2) | (4.7) | 3.5 | 全体にロクロナデ 高台端部に粉灰塗 | 底部外面に墨書 |
| 22 | - | T-15 | 遺構外 | 3層 | 透水器 | 瓶 | - | (11.4) | (9.2) | 全体にロクロナデ | 底部内面付近に自然釉がかかる |
| 23 | - | T-16 | SD1 | 11層 | 弥生土器 | 壺 | - | - | (3.7) | 内外面にヨコナデ | 外面に付着物 |
| 24 | 図版7 | T-16 | SD1 | 11層 | 弥生土器 | 壺 | - | (8.0) | (2.9) | 底部外面に布目直 底部外面に棒状工具による条痕 | |
| 25 | - | T-16 | SD1 | 11層 | 土師器 | 壺 | (17.8) | - | (4.4) | 頸部から口縁部外面にタテハケとナデ 頸部内面にヨコハケ | 全体に付着物 |
| 26 | - | T-16 | SD1 | 11層 | 土師器 | 台付壺 | - | 9.1 | (8.7) | 底部内面にナデ 台内面にナデとヘラナデ | 底部内面にコゲ目 |
| 27 | - | T-16 | SD1 | 11層 | 土師器 | 高坏 | - | (16.0) | (9.2) | 底部内面上部に工具痕とシボリ痕 下半にナデ | 2方透 厚塗 |
| 28 | 図版7 | T-16 | SD1 | 11層 | 土師器 | 壺 | - | - | (16.8) | 体部外面にタテハケ 体部内面にヨコハケとナデ 頸部内面に指オサエ工 | 全体に付着物 |
| 29 | 図版7 | T-16 | SD1 | 11層 | 土師器 | 壺 | (26.0) | - | (26.4) | 体部外面にハケ 体部内面にヘラナデ 頸部外面にキガキ目 口縁部内外面にヨコナデ | |
| 30 | - | T-16 | SD1 | 11層 | 土師器 | 壺 | (16.0) | - | (5.6) | 口縁部内外面にヨコナデ 頸部外面にタテハケ 頸部内面にナデと指オサエ工 | 頸部外面に沈線3条 頸部内面厚塗 |
| 31 | 図版7 | T-16 | SD1 | 11層 | 土師器 | 壺 | (17.6) | - | (6.1) | 頸部外面にヨコハケ 頸部から口縁部外面にナデ 頸部内面にヘラミガキ | 口縁部上面に斜交列点文3条 口縁部側面に凹線4条 厚塗 |
| 32 | - | T-16 | SD1 | 10層 | 土師器 | 鉢 | (20.0) | - | (7.8) | 体部内外面にヘラミガキ 口縁部内外面にヨコナデ | 口縁部に凹線2条 |
| 33 | 図版7 | T-16 | SD1 | 11層 | 土師器 | 鉢 | (10.4) | 2.0 | 7.4 | 全体にヘラミガキ | 口縁部外面に沈線2条 |
| 34 | - | T-16 | SD2 | 18層 | 木製品 | 建築部材 | 長さ 28.3 | 幅 17.2 | 厚さ 2.9 | 加工痕 | 穿孔 |
| 35 | - | T-16 | 遺構外 | 19層 | 土師器 | 高坏 | - | - | (7.6) | 頸部外面にヘラミガキ 頸部内面上部にシボリ痕 | 3方透か 厚塗 |
| 36 | - | T-16 | 遺構外 | 3層 | 土師器 | 高坏 | - | - | (10.8) | 頸部内面にシボリ痕 | 1方透 厚塗 |
| 37 | - | T-16 | 遺構外 | 3層 | 土師器 | 壺 | - | (6.0) | (9.5) | 底部外面にナデ 体部外面にヘラミガキ 体部内面にハケとナデ | 体部下半内面に煤付着 |
| 38 | - | T-16 | 遺構外 | 表土 | 灰軸陶器 | 椀 | (15.0) | - | (4.4) | 体部上部にロクロナデ 下部にヘラケスリ | 口縁部から体部中程外面に 灰粒を施す |
| 39 | 図版7 | T-16 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 小皿 | (8.3) | (5.2) | 1.2 | 底部外面に回転糸切り痕 底部内面にヨコナデ 体部から口縁部内外面にロクロナデ | 底部外面に墨書 |

SD 2 (17～20層) トレンチの中央で検出された溝で、SD 1 と並行して北東から南西方向に延びる。残存幅約6.23m、深さ0.3mを測る。断面は皿状を呈し、埋土は木片・炭化物を含む黒褐色シルトが主体である。遺構掘削時に木杭が1本出土した。水流の方向は標高の高い北東から南西への流れが想定される。時期は遺物から古墳時代前期と想定される。

遺物は土師器と木製品が出土した。このうち木製品1点を図示した。34は建築部材である。先端は4方向から削り落として尖らせ、釘孔が1か所みられる。

木材は34以外は炭木で、調査区外に延びていたため取り上げず現状保存のため埋め戻しを行った。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、灰軸陶器、陶磁器が出土した。山茶碗は東濃型の破片が多数を占める。このうち5点を図示した。35・36は土師器の高坏である。35は円形の透孔を2か所確認でき、廻間Ⅰ式期に相当する。36は円形の透孔を1か所確認でき、廻間Ⅰ式期に相当する。37は土師器の壺である。底部は平坦で器壁が厚く、廻間Ⅰ式期に相当する。38は瀬戸製の第2型式に相当する灰軸陶器の椀である。39は山茶碗の小皿である。底部外面に墨書を確認できるが、残存率が悪く詳細は不明である。東濃型で第7型式に相当する。

T-17 (図25・29)

耕作土から1.3～1.4mの深さまで掘削を行ったが、東西方向へ延びる近代の暗渠が3本検出されたのみで、検出面からの遺構・遺物は確認されなかった。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、陶器が出土した。土師器と陶磁器はほとんどが細片で、時期は不明である。出土遺物のうち東濃型の山茶碗2点を図示した。40・41は小皿である。40は底部が平坦で器壁が厚く、第5型式に相当する。41の底部内面はやや膨らみ、第9型式に相当する。

T-18 (図26・29)

耕作土から約0.7～0.8mの深さでS X 1を検出した。

S X 1 (2～4層) トレンチの南側の東壁面で確認した東西方向に直線状に延びる遺構で、残存幅約2.9m、深さ約0.5mを測る。断面は半円状を呈し、埋土は礫・木片を含んだシルトと砂質土が主体であった。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

遺構外遺物 土師器、須恵器、山茶碗、陶磁器が出土した。山茶碗は東濃型が多数を占める。土師器はほとんどが細片で、時期は不明である。出土遺物のうち2点を図示した。42は須恵器の坏身である。口縁部は外反し端部は丸くおさめ、美濃須衛Ⅲ期に相当する。43は山茶碗の小皿である。底部内面は大きくへこみ、体部は内湾し、口縁端部は面をなす。東濃型で第9型式に相当する。

T-19 (図27・29)

耕作土から約0.2～0.4mの深さでSD 1・2を検出した。

SD 1 (9～12層) トレンチの北側で検出された東西方向に延びる溝で、残存幅約2.7m、深さ約0.3mを測る。断面は皿状を呈し、埋土は大きく木片を含む粘質土と粗砂を多量に含む砂質土に分けられる。水流の方向は標高の高い東から西に向かう流れが想定される。時期は遺物から古墳時代前期と想定される。

遺物は土師器が出土したが、細片のため図示はできなかった。

SD 2 (2層) トレンチ中央の東壁面から確認された東西方向に延びる溝で、残存幅約5.1mを測り、検出面から約0.8m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。埋土はシルトを主体とする上層と黒褐色の有機質を含む粘質土と粗砂が互層に堆積した下層に分けられる。水流の方向は標高の高い東から西に向かう流れが想定される。時期は遺物から古墳時代前期と想定される。

遺物は土師器が2点出土したが、細片のため図示はできなかった。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、陶器が出土した。山茶碗と陶器はほとんどが細片で、時期は不明である。このうち土師器1点を図示した。44は甕である。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。廻間Ⅱ～Ⅲ式期に相当する。

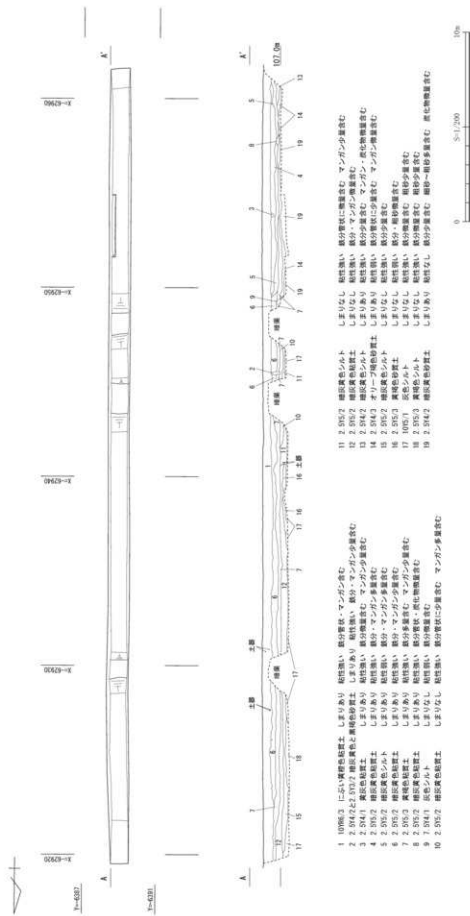


図 25 T-17 平面図・断面図

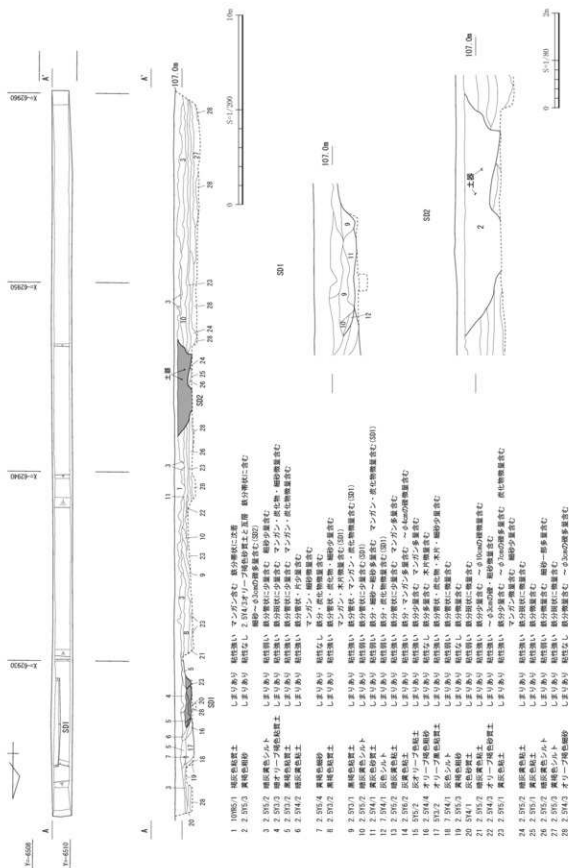


図 27 T-19 平面図・断面図

耕作土から約0.3～0.6mの深さでSD1・2、NR1、SW1、SX1を検出した。

SD1 (6～13層) トレンチの南側で検出された東西方向に延びる溝で、幅3.7m、深さ0.7mを測る。溝南岸からSW1が検出された。断面は逆台形状を呈し、埋土は礫を多量に含んだ砂質土が主体であった。また、溝北側から土砂が堆積するため人為的に埋められた可能性がある。水流の方向は標高の高い北西から南東への流れが想定される。埋土から木杭が出土しており、南岸にはSW1が構築されていることから、木制遺構を伴った溝である。

遺物の出土は認められなかったが、SW1がSD1に付随する遺構であるため、古墳時代前期と想定される。

SD2 (4～5層) トレンチの中央で検出された東西方向に延びる溝で、幅1.3m、深さ0.4mを測る。断面はレンズ状を呈し、水流の方向は標高の高い北から南への流れが想定される。埋土は木片を含む黒褐色粘質土が主体である。時期は遺物から古墳時代前期と想定される。

遺物は土師器が出土したが、細片のため図示はできなかった。

NR1 (2～3層) トレンチ北側の東壁面から確認された東西方向に延びる自然流路で、幅約1m、深さ約0.6mを測る。南岸の一部分のみ検出され、溝の北岸は調査区外のため全幅は不明である。埋土は木片を含む粘質土と砂質土の2層からなる。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

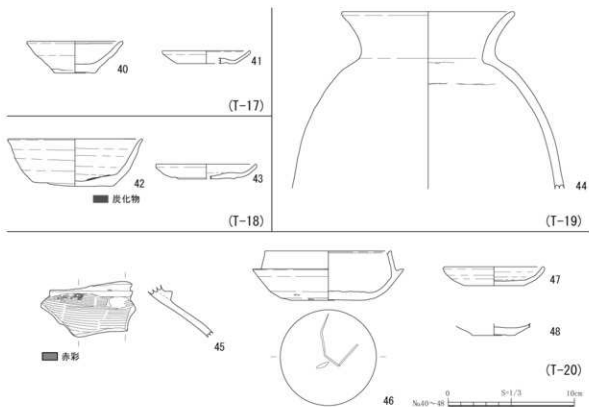
SW1 (14～21層) 土層観察の結果、SD1の南岸から確認された盛土で、残存幅約2m、高さ約0.5mを測る。盛土は木片・砂礫を含んだ粘質土、径3～5cmの礫を含んだ砂礫土が主体であった。遺構掘削時に盛土沈下防止のためと思われる、直径約10cmの横木が3本検出された。時期は遺物から古墳時代前期と想定される。

遺物は土師器が出土したが、細片のため図示はできなかった。

SX1 (23～24層) トレンチの中央で検出された東西方向に延びる遺構で、残存幅約5mを測り、検出面から約0.5m掘削した地点で湧水が認められ掘削を中止したため、本遺構は底面付近しか把握できなかった。埋土は2層に分けられる。下層は粘質土と粗砂が交互に堆積し、上層は粗砂を多量に含む砂質土であることから、流水の影響があったと考えられる。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

遺構外遺物 弥生土器、土師器、須恵器、山茶碗が出土した。弥生土器はほとんどが細片で、時期は不明である。山茶碗は東濃型が多数を占め、最も新しいもので第10型式と考えられる破片を含む。このうち4点を図示した。45は土師器の壺である。肩部と頸部の境界に貼付帯をもち、赤彩顔料が施されることから、パレススタイル壺であろう。廻間Ⅱ～Ⅲ式期に相当する。46は須恵器の坏身である。受部はやや斜め上方に突き出し、口縁部は内傾し、端部はへこむ。底部外面に窯記号と思われる線刻がみられる。美濃須衛窯Ⅱ期に相当する。47・48は山茶碗の小皿である。47の体部は直線的に立ちあがり、口縁部はわずかに内湾し、口縁端部は丸くおさめる。尾張型で第10型式に相当する。48の底部は平坦で器壁が厚く、外面に回転糸切り痕とスノコ痕を残す。東濃型で第5型式に相当する。



| 番号 | 写真 | 出土位置 | 遺構名 | 層位 | 種別 | 器種 | 法量 (cm) | | | 成・整形調整 | 備考 |
|----|-----|------|-----|-----|-----|----|---------|---------------|-------|---|------------------|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | |
| 40 | - | T-17 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 小皿 | (7.0) | (3.2) | 1.9 | 底部外面に静止糸切り痕 体部から口縁部内外面にロクロナデ | |
| 41 | - | T-17 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 小皿 | (7.0) | 4.6 | 1.0 | 全体にロクロナデ 底部外面に回転糸切り痕 | |
| 42 | 図版7 | T-18 | 遺構外 | 表土 | 消息器 | 坏身 | 10.6 | 6.4 | 3.8 | 全体にロクロナデ 底部外面にへら切り痕 底部内面にナデ | 底部内面に炭化物付着 |
| 43 | - | T-18 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 小皿 | (8.0) | (4.6) | 1.2 | 全体にロクロナデ 底部外面に回転糸切り痕 | |
| 44 | 図版7 | T-19 | 遺構外 | 表土 | 土師器 | 壺 | (13.6) | - | (4.0) | 全体にナデ 底部内面に指オサ工痕 | |
| 45 | - | T-20 | 遺構外 | 22層 | 土師器 | 壺 | - | - | (4.2) | 底部外面にヨコハケ 底部内面にナデ | 底部外面に貼付突帯。 赤彩 |
| 46 | 図版7 | T-20 | 遺構外 | 22層 | 消息器 | 坏身 | (10.0) | 最大径 (12.0) | 4.0 | 全体にロクロナデ 底部外面にへらケズリ | 底部外面に置記号か |
| 47 | - | T-20 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 小皿 | (7.8) | (4.6) | 1.5 | 全体にロクロナデ 底部外面に回転糸切り痕 | |
| 48 | - | T-20 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 小皿 | - | 3.4 | (0.9) | 全体にロクロナデ 底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕 底部内面に一方向のナデ | |

図 29 T-17 ~ 20 出土遺物

T-21 (図30・31・33)

耕作土から約0.3～0.7mの深さでNR1、SW1、SX1・2を検出した。

NR1 (5～17層) トレンチの南側、耕作土から約0.4mの深さで検出された自然流路で、SW1と共存する。残存幅約9.8mを測り、南岸は調査区外のため全幅は不明である。検出面より1.0m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。水流の方向は標高の高い東から西への流れが想定される。埋土は炭化物や木片を含んだ粘土や粘質土が主体であった。時期は遺物から古墳時代前期と想定される。

遺物は土師器が多数出土した。このうち2点を図示した。49・50は土師器で、いずれも廻間Ⅱ～Ⅲ式期に相当する。49は壺で、口縁部は直立し端部は丸くおさめる。50は甕で、体部から口縁部にかけてわずかに外反し、口縁端部は丸くおさめる。

SW1 (23～25層) トレンチの南側で検出された盛土で、NR1の北岸に構築されていることから、NR1に付随する遺構と考えられる。残存幅約4.2m、高さ約0.9mを測り、砂礫とシルト、砂質土を主体とする。北側は後世の削平を受ける。径5cm以上の礫を多量に含んでいるが、盛土内から横木、構造物などは確認されなかった。時期はNR1に付随することから、古墳時代前期と想定される。

SX1 (26～27層) トレンチの中央で検出された東西方向に延びる遺構で、残存幅約3.5mを測り、検出面から約0.4m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。断面は皿状を呈する。埋土は黒褐色粘質土、灰黄褐色粘質土が主体である。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

SX2 (30～34層) トレンチの北側で検出された東西方向に延びる遺構で、残存幅約8mを測り、検出面から約0.5m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。断面は皿状を呈し、埋土は灰色シルトを主体とする上層、木片を多量に含む粘質土層の2層に分けられる。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、陶磁器が出土した。山茶碗は東濃型が多数を占める。土師器と陶磁器はほとんどが細片で、時期は不明である。このうち山茶碗1点を図示した。51は碗である。底部は平坦で、底部と体部の境界内面はわずかにへこむ。体部は直線的にひらき、口縁端部を丸くおさめる。東濃型で第10型式に相当する。

T-22 (図32・33)

耕作土から約0.9mの深さでNR1を検出した。

NR1 (8～9層) トレンチの北側の東壁面から確認された東西方向に延びる自然流路で、残存幅約8.5mを測り、検出面から約0.2m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。埋土は砂を含んだ砂質土が主体である。水流の方向は、標高の高い北東から南西方向への流れが想定される。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

遺構外遺物 弥生土器、土師器、山茶碗が出土した。山茶碗は東濃型と考えられる破片が多数を占める。出土遺物のほとんどが細片で、時期は不明である。このうち弥生土器1点を図示した。52は甕である。底部外面に布目痕、底部内面にナデ、外面に棒状工具による条痕を施す。貝田町式期に相当する。

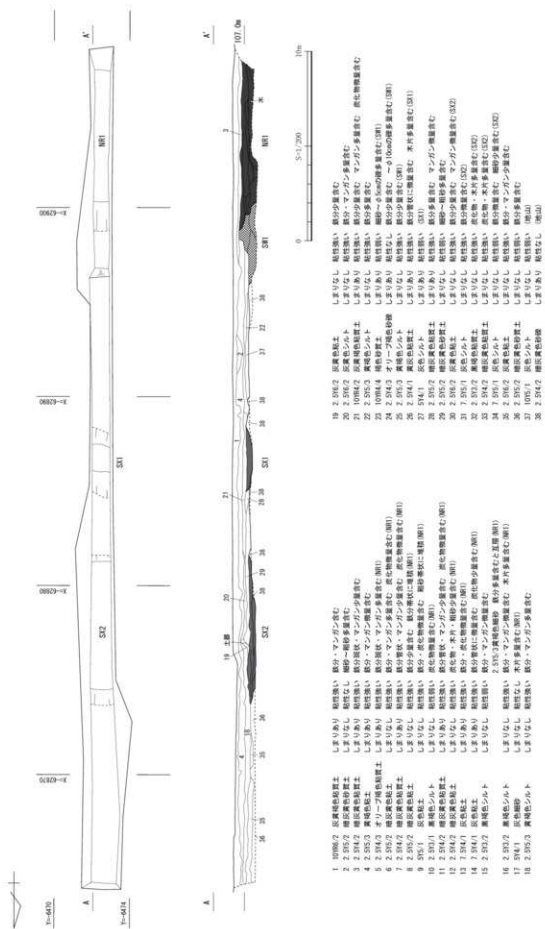


図 30 T-21 平面図・断面図

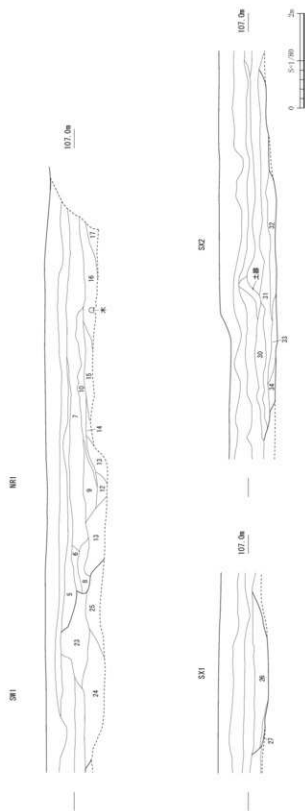


图 31 T-21 個別平面图・断面图

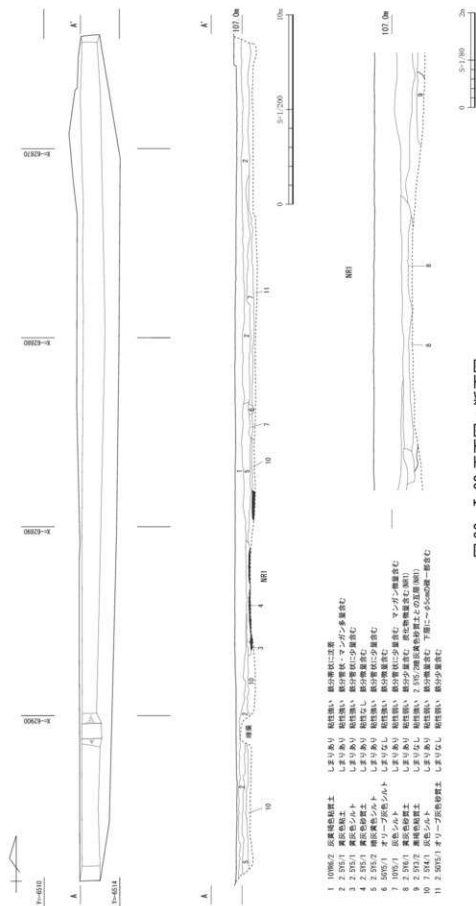


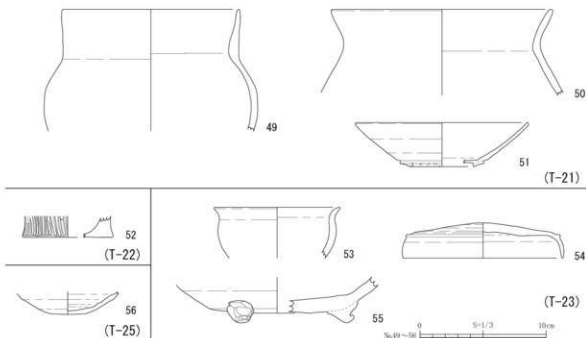
図 32 T-22 平面図・断面図

T-23 (図33)

耕作土から約1.1～1.2mの深さまで掘削を行った。検出面からの湧水および壁面の崩落が著しいため、トレンチ内の調査は危険であると判断し、記録作業を行わず埋め戻すこととなった。

検出面からの遺構・遺物は確認されなかった。

遺構外遺物 弥生土器、土師器、須恵器、山茶碗、陶磁器が出土した。山茶碗は東濃型と考えられる破片が多数を占める。出土遺物のほとんどが細片であるが、このうち3点を図示した。53は土師器の鉢である。全体の摩滅が著しいが、ナデの痕が残る。体部はゆるやかに内湾し、口縁部は外反する。廻間Ⅲ式期に相当する。54は須恵器の坏蓋である。天井部は全体的に歪み、天井部と口縁部の境に稜をもつ。I-101号窯式期に相当する。55は陶器の鉢か。底部は平坦で脚部は2か所のみ残存する。時期は不明である。



| 番号 | 写真 | 出土位置 | 遺構名 | 層位 | 種別 | 器種 | 法量(cm) | | | 成・整形調整 | 備考 |
|----|-----|------|-----|-----|------|----|--------|--------|-------|--|-----------|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | |
| 49 | - | T-21 | ⅢR1 | 21層 | 土師器 | 蓋 | (14.0) | - | (9.7) | 全体にナデ | 摩滅 |
| 50 | - | T-21 | ⅢR1 | 21層 | 土師器 | 蓋 | (17.4) | - | (6.8) | 全体にナデ | 摩滅 |
| 51 | - | T-21 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 碗 | (13.6) | (6.6) | 3.5 | 全体にロクロナデ 高台に整輪痕 底部外面に回転糸切り痕 底部外面に有目痕 底部側面に工具による変痕 底部内面にナデ | |
| 52 | - | T-22 | 遺構外 | 表土 | 弥生土器 | 蓋 | - | (7.0) | (1.7) | 全体にナデ | |
| 53 | - | T-23 | 遺構外 | 表土 | 土師器 | 鉢 | (10.0) | - | (4.0) | 全体にナデ | 摩滅 |
| 54 | 図版7 | T-23 | 遺構外 | 表土 | 須恵器 | 坏蓋 | (12.7) | (12.8) | 2.8 | 天井部外面にヘラケズリ 口縁部内外面にロクロナデ | 天井部外面に自然釉 |
| 55 | - | T-23 | 遺構外 | 表土 | 陶器 | 鉢? | - | (10.8) | (3.6) | 底部外面にロクロナデ 全体にロクロナデ 底部外面に回転糸切り痕 底部外面に指オサエ工 | |
| 56 | - | T-25 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 碗 | - | (3.0) | (1.8) | | 焼成不良 |

図 33 T-21～23・25 出土遺物

T-24 (図34)

耕作土から約1.2mの深さまで掘削を行ったが、東西方向へ延びる近代の暗渠が2本検出されたのみで検出面からの遺構は確認されなかった。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、陶磁器が出土したがほとんどが細片で、時期は不明である。

T-25 (図33・35)

耕作土から約0.3mの深さまでSX1を検出した。

SX1 (2～11層) トレンチの北側で検出された遺構で、残存幅約16mを測り、検出面から約0.5m掘削した地点で湧水と壁面崩落が著しいため掘削を中止した。20m程度の溝状遺構の可能性もあるが、壁面崩落部分に溝の立ち上がりが存在する可能性がある。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、陶器が出土した。山茶碗は東濃型と思われる破片が多数を占める。土師器と陶器はほとんどが細片で、時期は不明である。出土遺物のうち山茶碗1点を図示した。56は碗である。底部は平坦で、体部は直線的にひろく、東濃型で第11型式に相当する。

T-26 (図36・41)

耕作土から約0.5～0.6mの深さまでSX1・2を検出した。

SX1 (4～6層) トレンチの北側で検出された東西方向に延びる遺構で、残存幅約4.2mを測り、検出面から約0.8m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。断面は逆台形状を呈し、埋土は直径約10～15cmの木材を含んだ黒褐色粘質土が主体である。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

SX2 (8層) トレンチの南側で検出された東西方向に延びる遺構で、残存幅約1.9mを測り、検出面から約0.6m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。断面は逆台形状を呈し、埋土は暗灰黄色粘質土の単層である。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、陶磁器が出土した。山茶碗は東濃型と思われる破片が多数を占める。土師器と陶磁器はほとんどが細片で、時期は不明である。出土遺物のうち山茶碗1点を図示した。57は碗であり、口縁端部は面をなす。東濃型で第10または第11型式に相当する。

T-27 (図37・41)

耕作土から約0.6mの深さまでSX1を検出した。

SX1 (2～3層) トレンチの北側で検出された東西方向に延びる遺構で、残存幅約3.2m、深さ約0.7mを測る。遺構の南側のみが検出され、北岸は調査区外のため全幅は不明である。埋土は2層から成り上層がシルトと細砂の互層、下層が粘質土である。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

遺構外遺物 土師器と山茶碗が出土した。山茶碗は東濃型と思われる破片が多数を占める。土師器はほとんどが細片で、時期は不明である。出土遺物のうち山茶碗1点を図示した。58は碗である。底部は平坦で、貼付高台は底部周縁につく。瀬戸窯の第3または第4型式に相当する。

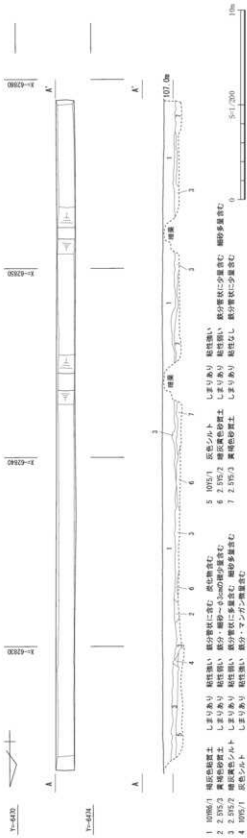


図 34 T-24 平面図・断面図

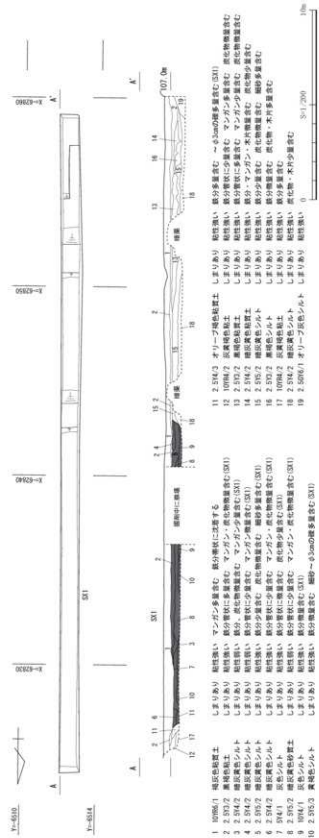


図 35 T-25 平面図・断面図

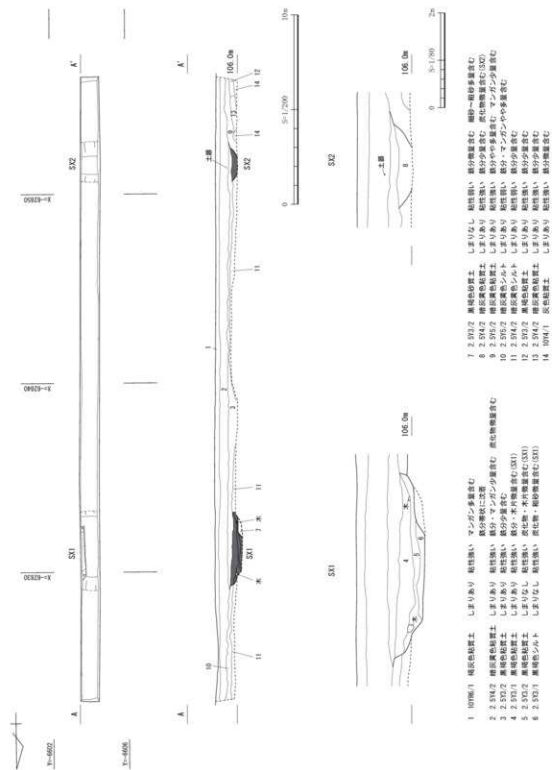


図 36 T-26 平面図・断面図

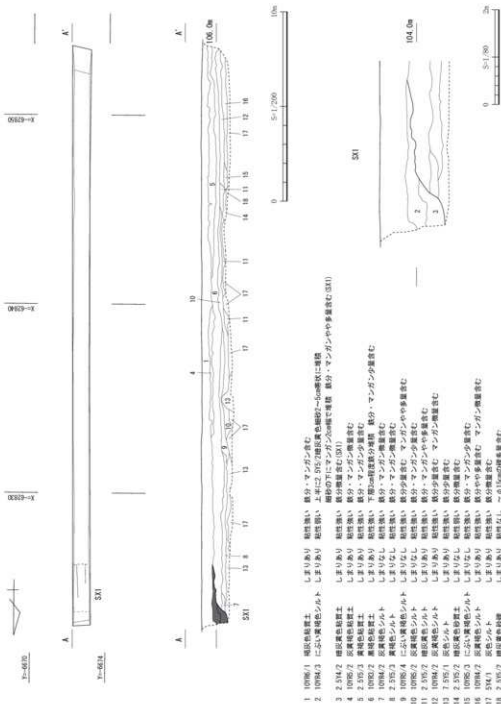


図 37 T-27 平面図・断面図

T-28 (図38・41)

耕作土から約0.6mの深さでSD1を検出した。

SD1 (9~12層) 北トレンチの北側で検出された東西方向に延びる溝で、残存幅約8.5mを測り、検出面から約0.5m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。溝の北岸は調査区外のため全幅は不明である。水流の方向は、標高の高い南東から北西への流れが想定される。時期は遺物から古墳時代前期と想定される。

遺物は土師器、木製品が出土した。土師器はほとんどが細片のため図示できなかったが、木製品

2点を図示した。59は大足の足板である。平面長方形の本体に、やや有頭状を呈する長方形の柄を作りだす。縦長の板材部に横位の圧痕が5か所と、複数の細かな擦痕が確認できる。60は杭である。丸木芯材材を使用し、先端は4方向から削り落として尖らせるが、上部は加工されておらず表皮が残る。水制遺構の構成材と考える。

遺構外遺物 弥生土器、土師器、山茶碗、陶器が出土した。出土遺物はほとんどが細片で、時期は不明である。このうち弥生土器1点を図示した。61は高坏である。体部はやや外反し、口縁端部に段をもつ。全体に摩滅が著しいが、外面に波状文が8条巡る。高蔵式期または山中中期に相当する。

T-29 (図39・41)

耕作土から約0.3mの深さでNR1を検出した。

NR1 (8～12層) トレンチの中央で検出された東西方向に延びる自然流路で、東西方向に延びる。残存幅約24.3mを測り、検出面から約0.5m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。水流の方向は標高の高い南東から北西への流れが想定される。埋土は粘質土と有機質を含む砂質土が主体で、溝掘削時に幅約90cm、長さ1.5mの流木が南東から北西に向かった状態で出土した。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

遺構外遺物 土師器と山茶碗が出土した。土師器と山茶碗はほとんどが細片で、時期は不明である。出土遺物のうち山茶碗1点を図示した。62は碗である。体部は直線的にひらき、口縁端部は丸くおさめる。東濃型で第9型式に相当する。

T-30 (図40・41)

耕作土から約0.1～0.5mの深さでSD1、SX1・2を検出した。

SD1 (8層) トレンチの北側で検出され、遺構の東西は調査区外のため全形は不明である。残存幅約0.62m、深さ約0.4mを測る。断面は台形状を呈し、埋土は単層で細砂を含んだ粘質土からなる。時期は遺物から近世以降と想定される。

遺物は山茶碗と陶器が出土したが、細片のため図示はできなかった。

SX1 (2～4層) トレンチの北側で検出された東西方向に延びる遺構で、残存幅約3.06m、深さ約0.51mを測る。断面は逆台形状を呈し、埋土は3層で粘質土と砂質土からなる。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

SX2 (11～12層) トレンチの北側で検出された東西方向に延びる遺構で、残存幅約2.06m、検出面から約0.4m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。断面は逆台形状を呈し、埋土は2層でシルトと細砂からなる。重複関係からSX1よりも古い別時期の遺構であるが、遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

遺構外遺物 土師器、須恵器、山茶碗、陶磁器が出土した。出土遺物のうち5点を図示した。63は須恵器の短頸壺である。口縁部はわずかに外反しながら直立し、肩部内面にナデを施す。口縁部内外面と肩部外面に自然釉がかかる。時期は不明である。64～67は東濃型の山茶碗である。64・65は小皿で、底部は平坦で器壁が厚い。口縁端部はわずかに外反する。64は第5型式、65は第4型式に相当する。66・67は碗である。66の体部は直線的にひらき、口縁端部は内傾した面をなす。第10または第11型式に相当する。67の底部は平坦で、体部はゆるやかに内湾して立ちあがり、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸くおさめる。第4型式に相当する。

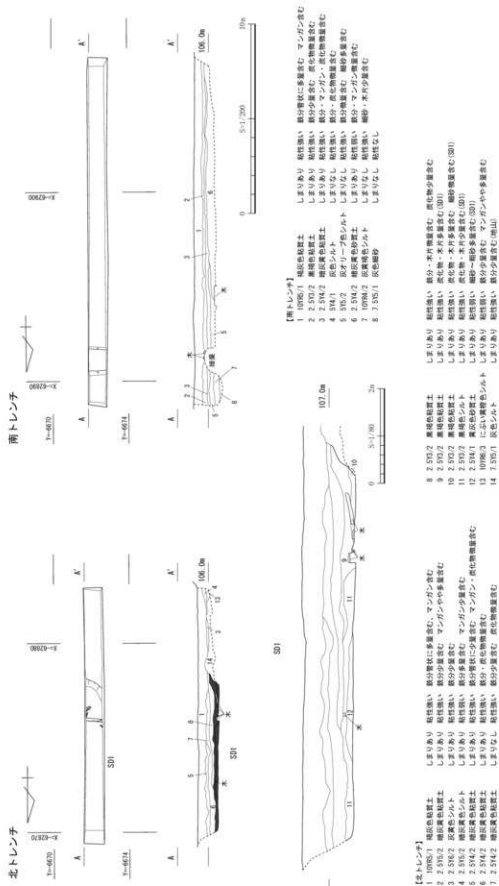


図 38 T-28 平面図・断面図

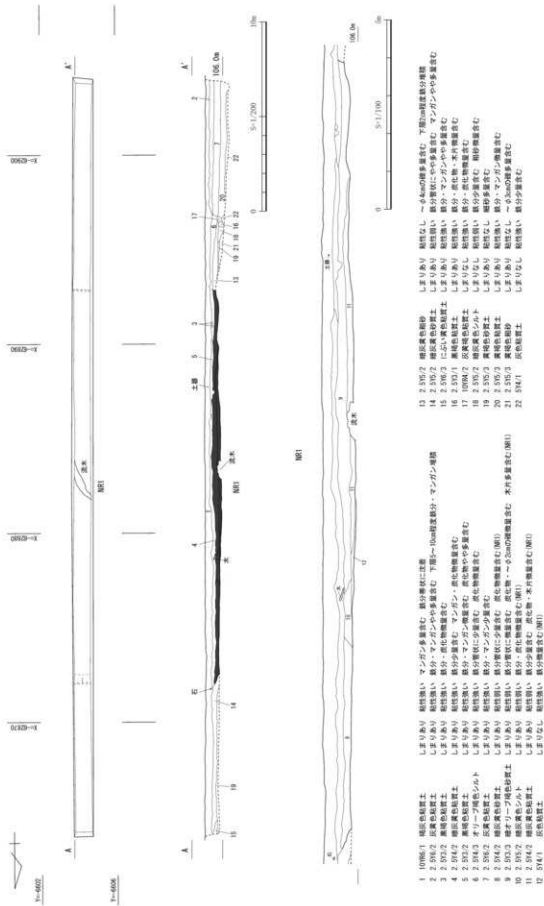


図 39 T-29 平面図・断面図

T-602

T-603

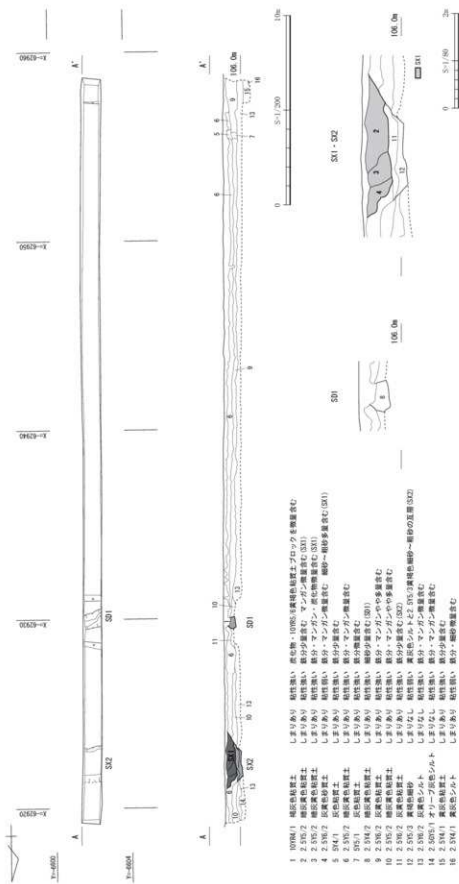


図 40 T-30 平面図・断面図

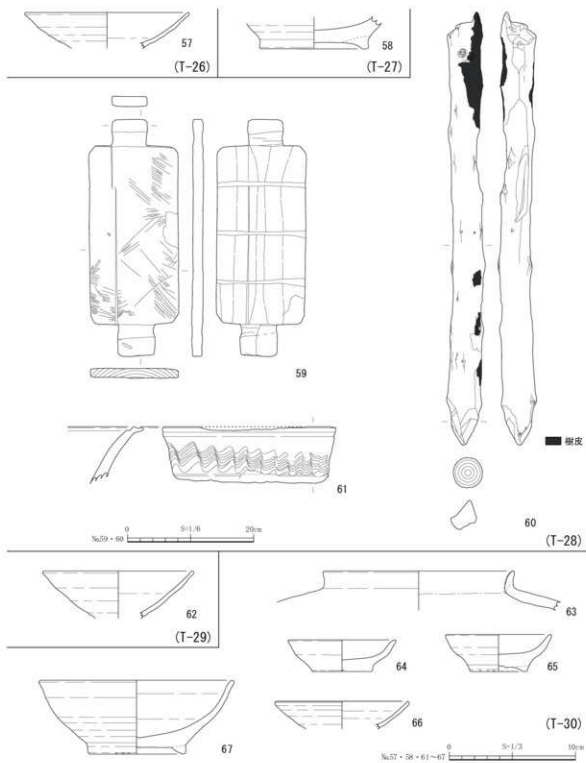


图 41 T-26 ~ 30 出土遺物

| 番号 | 写真 | 出土位置 | 遺構名 | 層位 | 種別 | 器種 | 法量(cm) | | | 成・整形調整 | 備考 |
|----|-----|------|-----|-----|------|-----|---------------|------------|-------------|-----------------------------------|---------------------|
| | | | | | | | ※()内は復元値・残存値 | 口径 | 底径 | | |
| 57 | - | T-26 | 遺構外 | 3層 | 山茶碗 | 碗 | (13.0) | - | (2.8) | 全体にロクロナデ | |
| 58 | - | T-27 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 碗 | - | 8.4 | (2.5) | 全体にナデ 底部外面に回転糸切り痕 | 焼成不良 |
| 59 | 図版8 | T-28 | SD1 | 9層 | 木製品 | 大足 | 長さ 37.6 | 幅 14.1 | 厚さ 1.6 | 加工痕 | 横持の圧痕が5本 |
| 60 | - | T-28 | SD1 | 10層 | 木製品 | 杖 | 長さ (68.5) | 幅 (4.6) | 厚さ (4.8) | 先端のみ加工痕 | 表皮が残る |
| 61 | 図版7 | T-28 | 遺構外 | 6層 | 弥生土器 | 高坏 | - | - | (4.5) | 口縁部外面にヨコナデ、波状文8条 | 付着物 摩滅 |
| 62 | - | T-29 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 碗 | (5.9) | - | (3.8) | 全体にロクロナデ 底部に磨蝕痕 | 口縁部内面に自然輪 |
| 63 | - | T-30 | 遺構外 | 表土 | 須恵器 | 短頸壺 | (15.0) | - | (3.1) | 肩部内面にナデ | 口縁部内外面と 肩部外面に自然輪 |
| 64 | 図版7 | T-30 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 小皿 | 8.4 | 4.6 | 2.5 | 全体にロクロナデ 底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕 | 体部外面から煤付着 |
| 65 | - | T-30 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 小皿 | (8.2) | (4.3) | 2.9 | 全体にロクロナデ 高台に磨蝕痕 底部外面に回転糸切り痕 | |
| 66 | - | T-30 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 碗 | (10.4) | - | 2.2 | 全体にロクロナデ | 体部内面に磨反 |
| 67 | 図版7 | T-30 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 碗 | (15.3) | 7.7 | 6.9 | 全体にロクロナデ 高台に磨蝕痕 底部外面に回転糸切り痕 | 内面全体に自然輪 |

T-31 (図42・47)

耕作土から約0.4mの深さでSD1・2を検出した。

SD1 (4～9層) トレンチの北側の東壁面から確認された東西方向に延びる溝で、残存幅約3mを測る。検出面から約0.4m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。水流の方向は標高の高い東から西への流れが想定される。断面形は皿状を呈し、埋土は炭化物を含む粘質土と細砂が主体である。時期は遺物から古墳時代前期と想定される。

遺物は縄文土器、土師器が出土した。縄文土器はほとんどが細片で、時期は不明である。このうち土師器1点を図示した。68は台付甕の脚台部である。底部内面は膨らみ、台部は直線的にひらいてハの字を呈し、端部を折り返す。廻間Ⅱ式期に相当する。

SD2 (2～3層) トレンチの北側で検出された東西方向に延びる溝で、残存幅約0.84m、深さ0.38mを測る。水流の方向は標高の高い東から西への流れが想定される。断面は逆台形状を呈し、埋土は2層で炭化物を含む粘質土からなる。時期は遺物から古墳時代前期と想定される。

遺物は土師器が出土し、このうち1点を図示した。69は甕である。体部はゆるやかに内湾して立ちあがり、口縁部は外反する。口縁端部にキザミ目を施す。廻間Ⅰ式後期～Ⅱ式初期に相当する。

遺構外遺物 土師器、須恵器、山茶碗、陶磁器が出土した。山茶碗は東濃型と考えられる細片が多数を占める。出土遺物はほとんどが細片で、時期は不明である。山茶碗1点を図示した。70は碗である。底部内面はへこみ、体部は直線的にひらく。東濃型で第11型式に相当する。

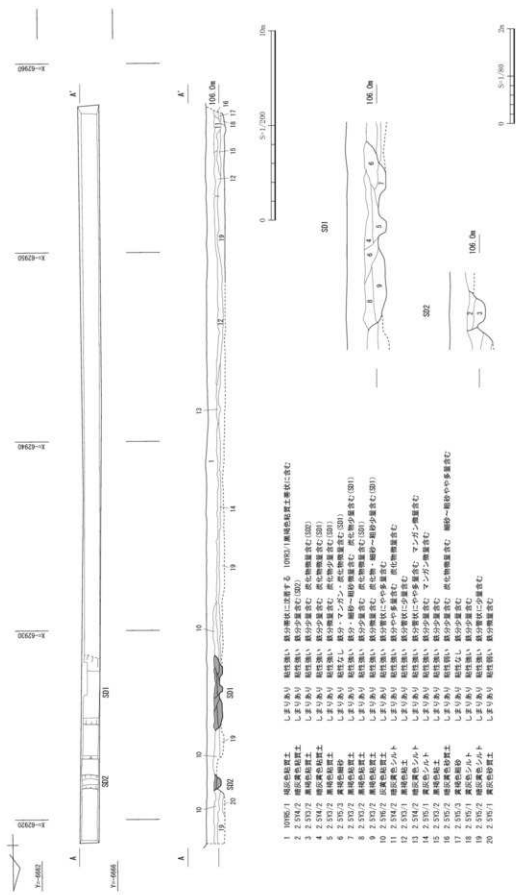


図 42 T-31 平面図・断面図

T-32 (図43)

耕作土から約0.8～0.9mの深さでSX1・2を検出した。

SX1 (18～20層) トレンチの中央で検出された東西方向に延びる遺構で、残存幅約2.7mを測り、検出面から約0.4m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。埋土は径3～5cmの礫を含む砂礫土を主体とし、溝南から土砂が堆積するため人為的に埋められた可能性がある。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

SX2 (21～24層) トレンチの中央で検出された東西方向に延びる遺構で、残存幅約3.4mを測り、検出面から約0.4m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。埋土はシルト・砂質土が主体で、土砂が交互に堆積することから人為的に埋められた可能性がある。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、陶磁器が出土したがほとんどが細片で、時期は不明である。

T-33 (図44・47)

耕作土から約0.4～0.5mの深さでSD1、NR1、SX1を検出した。

SD1 (6～10層) トレンチの南側で検出された東西方向に延びる溝で、残存幅約2.04m、深さ0.7mを測る。南岸は調査区外のため全幅は不明である。断面は逆台形状を呈し、埋土は炭化物を含む粘質土と粗砂からなる。水流の方向は北東から南西への流れが想定される。時期は遺物から弥生時代後期と想定される。

遺物は8層から弥生土器1点が出土した。71は甕である。口縁部は外傾して端部を丸く折り返す。口縁部内面に波状文が4または5条横位に巡り、端部内面に櫛状工具による刺突文が施される。口縁部外面にハケメ、端部外面にキザミ目を施す。高蔵式期に相当する。

NR1 (15～18層) トレンチの中央で検出された自然流路で、SX1と並行して東西方向に延びる。残存幅約7.45m、検出面から約0.9m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。断面は皿状を呈し、埋土は上層が粘質土、最下層は砂を含んだ砂質土であった。水流の方向は東から西への流れが想定される。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

SX1 (2～4層) トレンチの北側で検出された遺構で、NR1と並行して東西方向に延びる。残存幅約1.08m、深さ0.39mを測る。断面はU字状を呈し、埋土は炭化物を含む粘質土とシルトからなる。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

遺構外遺物 土師器、須恵器、山茶碗、陶器が出土した。山茶碗は東濃型と考えられる破片が多数を占める。出土遺物はほとんどが細片で、時期は不明である。このうち山茶碗1点を図示した。72は小皿である。底部は器壁がやや厚く、底部内面はわずかに膨らむ。瀬戸窯の第5型式に相当する。

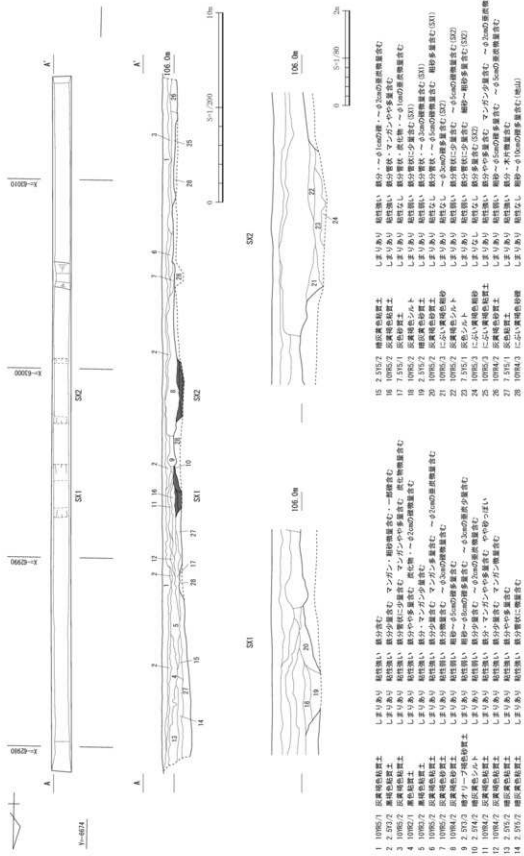


図 43 T-32 平面図・断面図

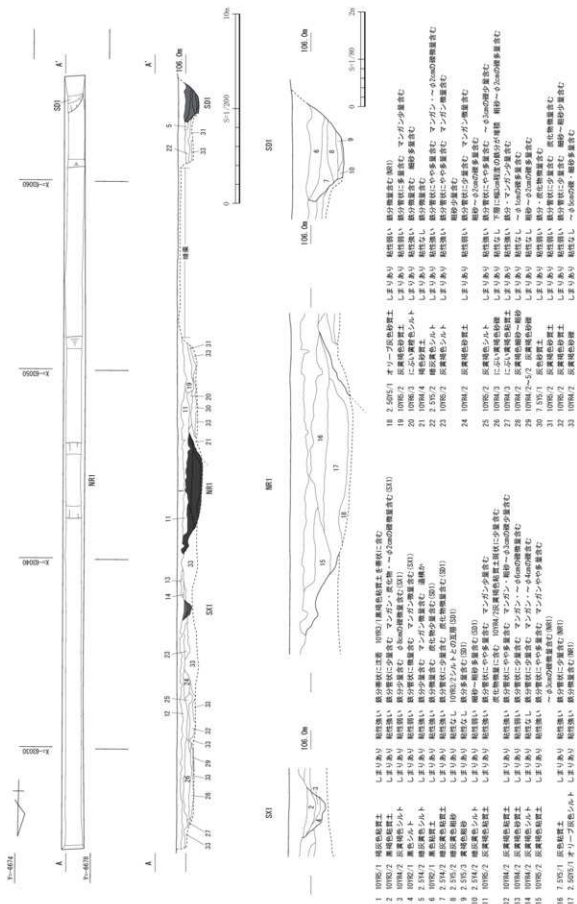


図 44 T-33 平面図・断面図

T-34 (図45・47)

耕作土から約0.5～0.9mの深さでSX1・2を検出した。

SX1 (7～11層) トレンチの中央から検出された東西方向に延びる遺構で、北側の上端は後世の攪乱による削平を受けている。遺構の中央は近代の暗渠を高台として残しているため遺構の全容は不明であるが、2本の溝状遺構が重複する可能性がある。全幅約12.4mを測り、検出面から約0.9m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。断面は皿状を呈し、埋土は上層が木片、炭化物を含む粘質土、下層は細砂～粗砂であった。遺構底面からは流木が出土した。埋土の堆積から別時期の溝が2本存在する可能性がある。

流木以外の遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

SX2 (23～25層) トレンチの南側から検出された遺構で、遺構西半分は調査区外のため全形は不明である。平面形は円形と思われる。埋土は3層に分かれ、どの層にも細砂が含まれていた。3層から柱材と思われる木片が検出されたことから柱痕の可能性がある。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、陶器が出土した。土師器と陶器はほとんどが細片で、時期は不明である。このうち山茶碗1点を図示した。73は小皿である。底部内面は大きくへこみ、口縁端部はやや内傾した面をなす。東濃型で第9型式に相当する。

T-35 (図46・47)

耕作土から約0.9～1.0mの深さでSX1・2を検出した。

SX1 (15～17層) トレンチの中央で検出された東西方向に延びる遺構で、残存幅約3.9m、深さ0.48mを測る。遺構の北側のみ検出され、南側は調査区外のため全幅は不明である。埋土は細砂～10cmの礫、腐植土を多量に含んだシルトからなる。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

SX2 (11層) トレンチ北側で検出された遺構で、壁面土層観察から遺構と判断した。断面はU字状を呈する。埋土は単層で粗砂を含んだ粘質土からなる。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、陶器が出土した。山茶碗は東濃型と考えられる破片が多数を占める。その他はほとんどが細片で、時期は不明である。このうち3点を図示した。74・75は山茶碗である。74は碗で、底部外面に「十」と思われる赤彩が認められる。尾張型で第8型式に相当する。75は小皿で、東濃型で第7型式に相当する。76は土師器のかわりけである。口縁部は直線的にひらき、端部を丸くおさめる。口縁部内外面に煤が付着する。残存率が悪く、時期は不明である。

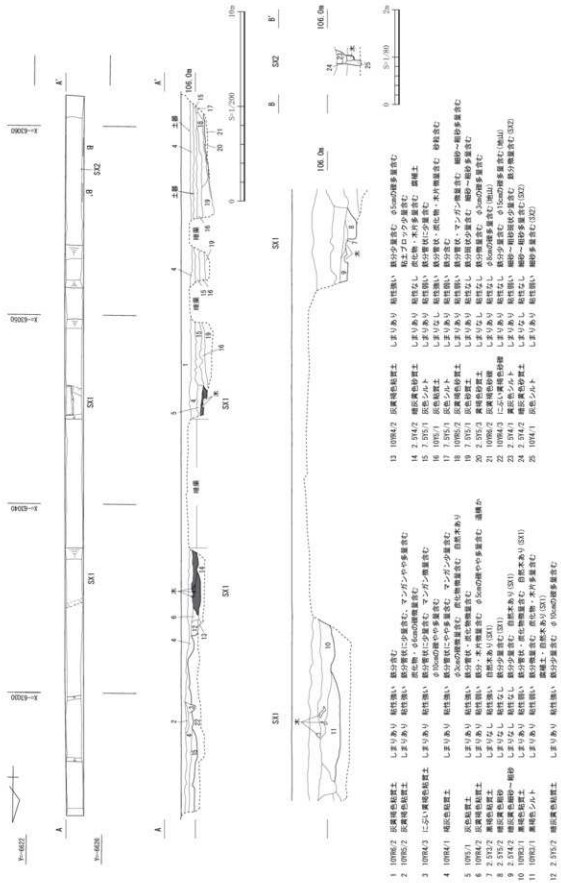


図 45 T-34 平面図・断面図

- | | | | | | | |
|-------------------|-------|------|------|-------|------|------|
| 1 100R2 灰黄色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 2 100R2 灰黄色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 3 100R2 にごり質褐色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 4 100R4 褐色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 5 100R1 灰色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 6 100R2 灰黄色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 7 2.5S2 褐色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 8 2.5S2 褐色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 9 2.5S2 褐色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 10 100R2 灰黄色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 11 100R2 灰黄色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 12 2.5S2 褐色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 13 100R2 灰黄色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 14 2.5S2 褐色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 15 2.5S3 灰色シルト | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 16 100R1 褐色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 17 2.5S1 灰色シルト | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 18 100R2 灰黄色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 19 2.5S3 褐色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 20 2.5S3 褐色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 21 100R2 灰黄色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 22 100R2 灰黄色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 23 2.5S2 褐色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 24 2.5S2 褐色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |
| 25 100R1 褐色粘質土 | しまりあり | 粘性強い | 級分含む | しまりあり | 粘性強い | 級分含む |

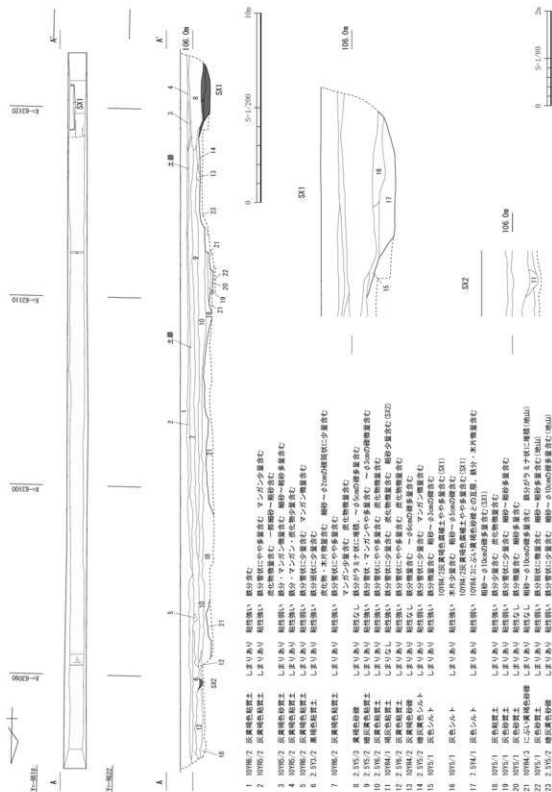
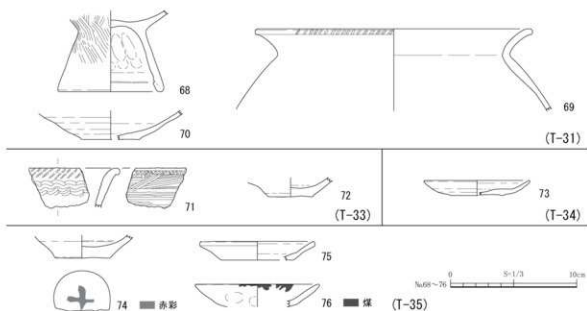


図 46 T-35 平面図・断面図

- 1 10796.2 灰褐色粘質土 しまりあり 粘性強い 鉄分高直 鉄分高直
- 2 10796.2 灰褐色粘質土 しまりあり 粘性強い 鉄分高直にやや多量直直; マンガン少量直直; 灰化物少量直直; 一部鉄屑～鉄砂直直
- 3 10796.2 灰褐色粘質土 しまりあり 粘性強い 鉄分高直にやや多量直直
- 4 10796.2 灰褐色粘質土 しまりあり 粘性強い 鉄分・マンガン少量直直
- 5 10796.2 灰褐色粘質土 しまりあり 粘性強い 鉄分高直に少量直直; マンガン少量直直
- 6 2.570.2 黒褐色粘質土 しまりあり 粘性強い 灰化物・木片少量直直; 鐵屑～6.5mmの鉄屑直直に少量直直
- 7 10796.2 灰褐色粘質土 しまりあり 粘性強い 鉄分高直にやや多量直直; マンガン少量直直; 灰化物少量直直
- 8 2.570.2 黄褐色砂礫土 しまりあり 粘性なし 鉄分中まじりに鉄屑～5.0mmの砂多量直直
- 9 2.570.2 灰褐色粘質土 しまりあり 粘性強い 鉄分高直にやや多量直直; 鉄分高直に少量直直; 5.0mmの鉄屑少量直直
- 10 2.570.2 灰褐色粘質土 しまりあり 粘性強い 鉄分高直にやや多量直直; 灰化物少量直直
- 11 10794.7 緑灰色粘質土 しまりなし 粘性強い 鉄分高直にやや多量直直; 灰化物少量直直; 鐵砂少量直直(SX2)
- 12 2.570.2 灰褐色粘質土 しまりあり 粘性強い 鉄分高直にやや多量直直; 灰化物少量直直
- 13 10794.2 灰褐色粘質土 しまりあり 粘性なし 鉄分高直に少量直直; 一e-6.0mmの砂多量直直
- 14 2.570.2 緑灰色シルト しまりあり 粘性強い 鉄分高直に少量直直; マンガン少量直直
- 15 10794.2 灰褐色粘質土 しまりあり 粘性強い 鉄分高直に少量直直; 鐵屑～6.5mmの鉄屑直直(SX1)
- 16 10795.1 灰色シルト しまりあり 粘性強い 木片少量直直; 鐵屑～6.5mmの鉄屑直直
- 17 2.570.1 灰色シルト しまりあり 粘性強い 10794.2にぶらり塊状砂礫との互層; 鉄分・木片少量直直(SX1)
- 18 10795.1 灰色粘質土 しまりあり 粘性強い 鉄分少量直直; 10794.2にぶらり塊状砂礫との互層; 鉄分・木片少量直直(SX1)
- 19 10795.1 灰色粘質土 しまりあり 粘性強い 鉄分少量直直; 灰化物少量直直
- 20 10794.2 灰褐色粘質土 しまりあり 粘性強い 鉄分高直に少量直直; 鐵屑～鉄砂少量直直
- 21 10794.2 にぶらり塊状砂礫土 しまりあり 粘性なし 鉄分高直に少量直直; 鐵屑～6.5mmの砂多量直直; 鉄分がまじりに塊状(地山)
- 22 10795.1 灰色粘質土 しまりあり 粘性強い 鉄分高直に少量直直; 鐵屑～鉄砂少量直直(地山)
- 23 2.570.2 緑灰色砂礫土 しまりあり 粘性強い 鉄分高直に少量直直; 鐵屑～e 10.0mmの砂多量直直(地山)



| 番号 | 写真 | 出土位置 | 遺構名 | 層位 | 種別 | 器種 | 法量 (cm) | | | 成・整形調整 | 備考 |
|----|-----|------|-----|----|------|------|---------|-------|-------|---------------------------------------|-------------|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | |
| 68 | 図版7 | T-31 | SD1 | 7層 | 土師器 | 台付甕 | - | (8.2) | (6.5) | 底部から台上部外面にハケメ 下部にナシ 底部内面に指オサエ工 | 台部外面に煤付着 |
| 69 | - | T-31 | SD2 | 3層 | 土師器 | 甕 | (21.4) | - | (6.5) | 口縁部外面にキザミ目 | |
| 70 | - | T-31 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 碗 | - | (4.6) | (2.3) | 全体にロクロナシ 底部外面に回転糸切り痕 | |
| 71 | 図版7 | T-33 | SD1 | 8層 | 弥生土器 | 甕 | - | - | (3.2) | 口縁部外面にハケメ、キザミ目 口縁部内面に刻文、波状文4~5条、ナシ | |
| 72 | - | T-33 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 小皿 | - | 3.6 | 1.5 | 全体にロクロナシ 底部外面に回転糸切り痕 底部内面に一方のナシ | |
| 73 | - | T-34 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 小皿 | (8.2) | (4.2) | 1.2 | 全体にロクロナシ 底部外面に回転糸切り痕 | |
| 74 | - | T-35 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 碗 | - | 4.3 | (1.8) | 全体にロクロナシ 底部外面に回転糸切り痕 | 赤影 内面に墨か |
| 75 | - | T-35 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 小皿 | (8.9) | (5.6) | 1.5 | 全体にロクロナシ 底部外面に回転糸切り痕 | |
| 76 | - | T-35 | 遺構外 | 表土 | 土師器 | かわらけ | (9.8) | - | (1.8) | 非ロクロナ製 底部外面に指オサエ工 | 煤付着 |

図 47 T-31 ~ 35 出土遺物

T-36 (図48)

耕作土から約0.4~0.8mの深さでSA1、水田面1枚、SW1を検出した。

SA1 (2~4層) トレンチ中央の東壁面から確認された杭列跡である。杭の直径は4~6cm、南北方向に0.1~2.5m間隔で3本並んでいるのを確認した。埋土はいずれも粗砂を微量に含んだシルト~砂質土である。遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

水田面 (21~26層上面) トレンチ南側の東壁面から、幅約12mにわたって検出され、垂下した鉄分の凝集が著しいため水田面であると判断した。検出面の傾斜は南に向かってわずかに上がる。検出時に水田に伴う畦畔や溝など水回りを推定できる遺構や水田面に伴う遺物は検出されなかった。

SW1 (16~19層) トレンチ中央の東壁面から確認された盛土で、南側の水田に対する護岸施設と考える。盛土の残存幅約7.4m、高さ約0.62mを測り、北側がシルトおよび粘質土、南側が砂礫土を主体とする層で分けられる。盛土内からは横木、構造物材など確認されず、遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、陶器が出土したがほとんどが細片で、時期は不明である。

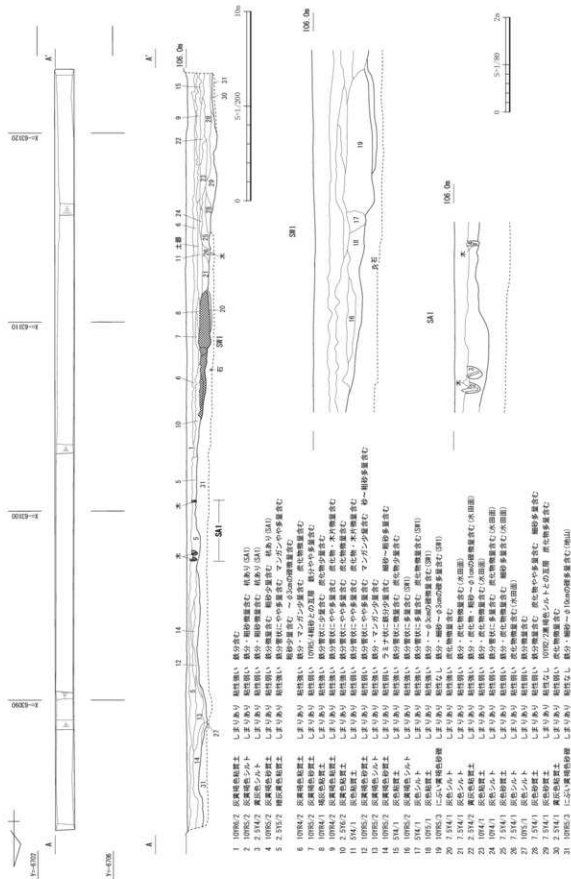


図 48 T-36 平面図・断面図

T-37 (図49・53)

耕作土から約0.4～0.6mの深さでSA1、水田面1枚、SX1を検出した。

SA1 (2～4層) トレンチ中央の東壁面から確認された杭列跡である。検出された3本の杭の直径は15～20cm、南北方向に0.5～1.3m間隔で並んでいるのを確認した。埋土はいずれも粘質土で、木杭の残存は確認出来なかった。SA1は、検出された水田面に伴う杭列と推測され、SX1・水田面と同時期と推測される。

水田面 (8・9層) SX1を境に、南北に広がる8層・9層上面を水田面とした。各層の上面はほぼ平坦で、垂下した鉄分の凝集が著しいため水田面であると判断した。特に9層においてはグライ化が著しい。

遺物の出土数はごく少数であるため、時期を判断するのは難しい。

SX1 (6～7層) トレンチ南側の東壁面から確認された東西方向へ延びる遺構で、残存幅約1.6m、深さ約0.5mを測る。水流の方向は標高の高い東から西への流れが想定される。埋土は粗砂を含むシルトと砂質土の2層からなる。遺構底面に砂が堆積することから流水があったと考えられる。水田面とほぼ同じ標高で検出されたため、水田に伴う区画溝であると推測される。遺物の出土数はごく少数であり、時期は不明である。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、陶磁器が出土した。出土遺物はほとんどが細片で、時期は不明である。このうち山茶碗1点を図示した。77は小皿である。全体に歪み、口縁端部は面をなす。東濃型で第9型式に相当する。

T-38 (図50・53)

耕作土から約1.4mの深さまで掘削を行ったが、検出面からの遺構・遺物は確認できなかった。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、陶器が出土した。土師器と陶器はほとんどが細片で、時期は不明である。山茶碗は東濃型が多数を占める。このうち山茶碗1点を図示した。78は碗である。体部は直線的にひらき、口縁端部は内傾した面をなす。東濃型で第5型式に相当する。

T-39 (図51・53)

耕作土から約0.8mの深さでNR1を検出した。

NR1 (7～17層) トレンチの中央で検出された東西方向に延びる自然流路で、残存幅約15.5mを測り、検出面から約0.9m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。溝の北岸のみ検出され、南岸は調査区外のため全幅は不明である。水流の方向は北東から南西への流れが想定される。埋土は大きく粘質土と砂質土に分けられる。流路の下面は粘質土～砂質土が交互に堆積し、常時流水があったと考えられる。時期は遺物から中世以降である。

遺物は山茶碗が出土したが、細片のため図示は出来なかった。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、陶器が出土した。出土遺物はほとんどが細片で、時期は不明である。このうち2点を図示した。79は山茶碗の小皿である。底部内面はややへこみ、口縁端部はやや外反して丸くおさまる。東濃型で第9型式に相当する。80は土師器の高坏である。脚部は明瞭に屈曲し、廻間Ⅱ式期に相当する。

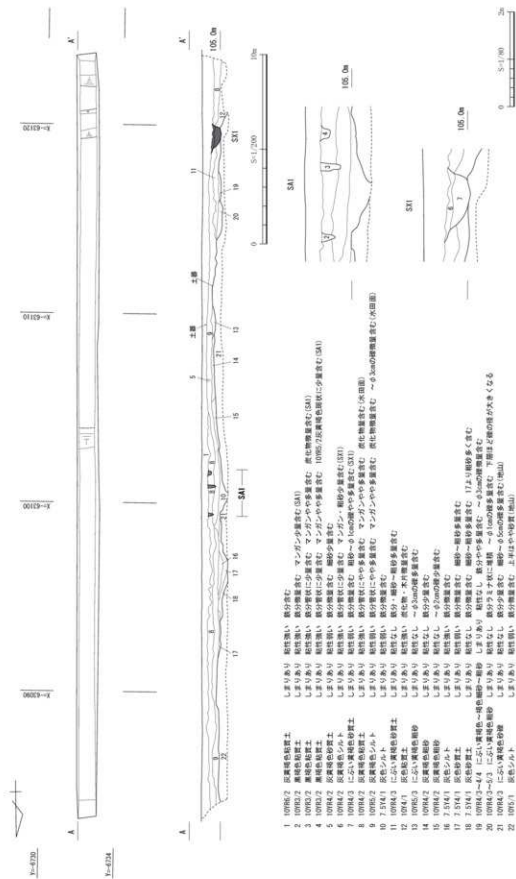


図 49 T-37 平面図・断面図

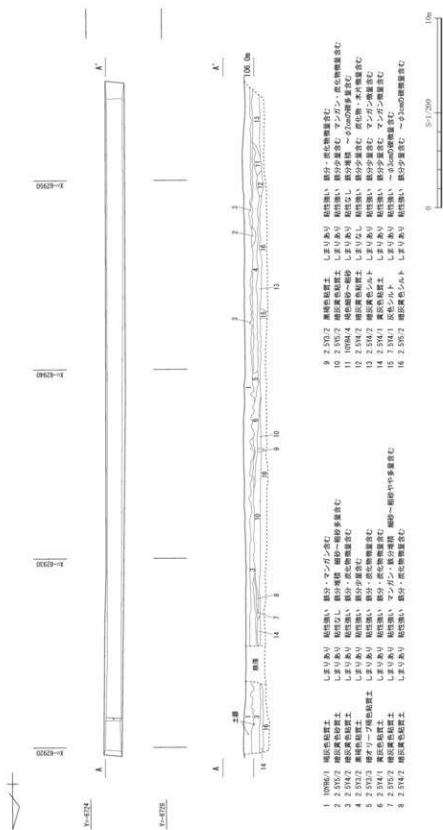


図 50 T-38 平面図・断面図

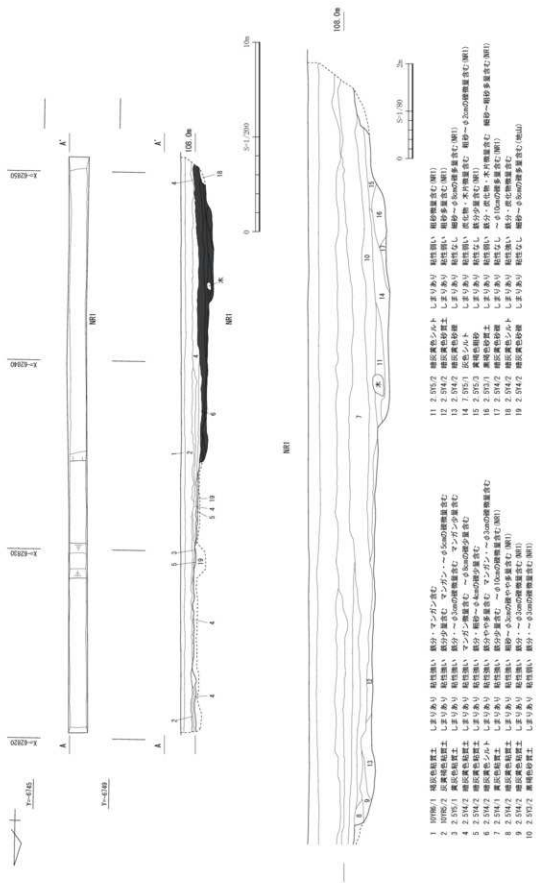


図 51 T-39 平面図・断面図

T-40 (図52・53)

耕作土から約0.3～0.6mの深さでSD1・2、NR1、SW1を検出した。

SD1 (4～8層) トレンチの北側で検出された溝で、SD2と並行して東西方向に延びる。残存幅約4.1mを測り、検出面から約0.7m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。埋土は炭化物・木片を含む黒褐色粘質土が主体で、灰黄褐色粘質土がブロック状に含んでいることから人為的に埋められた可能性がある。水流の方向は標高の高い東から西への流れが想定される。時期は遺物から中世以降と想定される。

遺物は土師器と山茶碗が出土した。土師器と山茶碗はほとんどが細片で、時期は不明である。

SD2 (9～16層) トレンチの北側で検出された東西方向に延びる溝で、残存幅約4.1mを測り、検出面から約0.8m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。埋土は炭化物・木片を含む黒褐色粘質土が主体で、灰黄褐色粘質土をブロック状に含んでいることから人為的に埋められた可能性がある。水流の方向は標高の高い東から西への流れが想定されるが、検出範囲が狭いため不明である。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。SD1と検出面が同じであることから、同時期の遺構と想定される。

NR1 (23～24層) トレンチの北側で検出された東西方向に延びる自然流路で、残存幅約3.6mを測る。検出面から約0.5m掘削した地点で湧水が認められたため掘削を中止した。北岸は調査区外のため全幅は不明である。水流の方向は標高の高い東から西方向への流れが想定される。埋土は炭化物と木片を含んだ粘質土とシルトの2層である。また、土層断面の検討の結果、NR1に付随する盛土状の高まりをSW1(21～22層)と判断した。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

SW1 (21～22層) トレンチ北側の東壁面の土層観察時に、NR1の南岸から確認された盛土で、残存幅約2m、高さ約0.5mを測る。盛土は上層が砂質土・下層が粗砂に大別される。NR1に隣接して構築されることから護岸施設であると推測される。

遺物の出土は認められなかったため、時期は不明である。

遺構外遺物 土師器、山茶碗、陶器が出土した。山茶碗は東濃型の破片が多数を占め、最も新しいもので第9型式に相当すると考えられる破片を含む。土師器と陶器はほとんどが細片で、時期は不明である。このうち土師器1点を図示した。81は壺である。底部は平坦で器壁が厚く、体部は丸みをもつ。廻間Ⅲ式期以降から松戸式期に相当する。

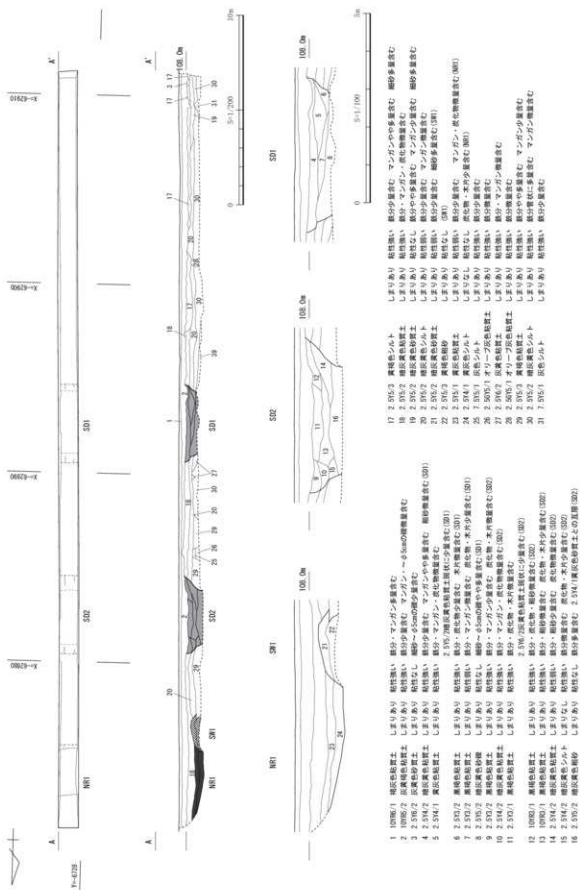
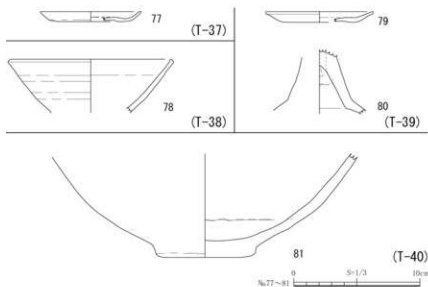


図 52 T-40 平面図・断面図



| 番号 | 写真 | 出土位置 | 遺構名 | 層位 | 種別 | 器種 | 法量 (cm) | | | 成・整形調整 | 備考 |
|----|----|------|-----|-----|-----|----|---------------|-------|-------|----------------------------|--------|
| | | | | | | | ※()内は僅元値・残存値 | 口径 | 底径 | | |
| 77 | - | T-37 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 小皿 | (8.0) | (6.6) | 0.8 | 全体にロクロナ字 底部外面に回転糸切り痕 | |
| 78 | - | T-38 | 遺構外 | 表土 | 山茶碗 | 碗 | (12.6) | - | (4.3) | 全体にロクロナ字 | 内面に自然釉 |
| 79 | - | T-39 | 遺構外 | 4層 | 山茶碗 | 小皿 | (8.4) | (5.6) | (0.9) | 全体にナ字 底部外面に回転糸切り痕 | |
| 80 | - | T-39 | 遺構外 | 表土 | 土師器 | 高坏 | - | - | (5.1) | 細部内面上部に指オサエ痕 下部にナ字 | 摩滅 |
| 81 | - | T-40 | 遺構外 | 18層 | 土師器 | 蓋 | - | (7.8) | (8.2) | 底部内面にヨコナデと指オサエ痕 底部外面にナ字 | |

図 53 T-37 ~ 40 出土遺物

第4章 自然科学分析

第1節 柿田西遺跡出土木製品・木材の樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

可児川により形成された沖積平野上、および遺跡の南側に展開する浅間丘陵地の扇状地上に立地する柿田西遺跡から出土した木製品・木材についての樹種同定を行なった。

2. 試料と方法

試料は、T-4、T-8、T-16、T-28から出土した、木製品・木材7点である。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定は、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柎目)について、カミソリで薄切切片を切り出し、ガムクロラルで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

同定の結果、針葉樹のコウヤマキとサワラ、ヒノキ科の3分類群と、広葉樹のクリとコナラ属アカガシ亜属(以下、アカガシ亜属)、カエデ属の3分類群の、計6分類群がみられた。クリが2点で、他の樹種は各1点であった。同定結果を表1に示す。

表1 木製品・木材の樹種同定結果一覧

| 掲載番号 | トレンチ名 | 遺構名 | 層位 | 器種 | 樹種 | 木取り | 時期 |
|--------|-------|-----|-----|------|----------------|-------|--------|
| 図8-8 | T-4 | - | 20層 | 建築部材 | クリ | みかん割り | 不明 |
| 図8-5 | T-4 | SX1 | 4層 | 杭 | クリ | 半割 | 不明 |
| 図8-4 | T-4 | SK1 | 8層 | 欄 | コナラ属 アカガシ亜属 | 柎目 | 古墳時代前期 |
| 図15-18 | T-8 | NR1 | 7層 | 杭 | コウヤマキ | 角材 | 近世 |
| 図24-34 | T-16 | SD2 | 18層 | 建築部材 | ヒノキ科 | 柎目 | 古墳時代前期 |
| 図41-39 | T-28 | SD1 | 9層 | 大足 | サワラ | 板目 | 古墳時代前期 |
| 図41-60 | T-28 | SD1 | 10層 | 杭 | カエデ属 | 芯持丸木 | 古墳時代前期 |

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

(1) コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Siebold et Zucc. コウヤマキ科 図54 1a-1c(図15-8)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ1~5列となる。分野壁孔は窓状となる。

コウヤマキは温帯から暖帯にかけて隔離分布をしている1科1属1種の常緑高木の針葉樹で、日本の固有種である。材はやや軽軟、切削などは容易で、水湿に耐朽性がある。

(2) サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図54 2a-2c(図41-59)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部はやや薄く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は同性で、高さ1~6列となる。分野壁孔はやや開いて斜めを向いたヒノキ型となり、1分野に2個みられる。

サワラは岩手県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は軽軟で加工しやすく、水湿によく耐える。

(3) ヒノキ科 Cupressaceae 図54 3a-3c(図24-34)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は同性で、高さ1～6列となる。分野壁孔の形状は溶けていて確認できなかったが、1分野に2個みられる。

(4) クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科 図55 4a-4c(図8-8)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火災状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列である。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

(5) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図55 5a-5c(図8-4)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと同放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察のみでは、道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強韌で、耐水性があり、切削加工は困難である。

(6) カエデ属 *Acer* ムクロジ科 図55 6a-6c(図41-60)

小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや疎らに散在する散孔材である。木部繊維の壁の厚さの違いで、木口面に雲紋状の文様がみられる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅1～6列となる。

カエデ属にはイタヤカエデやウリハダカエデなどがあり、代表的なイタヤカエデは各地に普通にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工はやや困難である。

4. 考察

杭は、コウヤマキとクリ、カエデ属であった。コウヤマキは水湿に強く、クリは耐朽性が高い。また、コウヤマキは比較的軽軟で、クリとカエデ属は堅硬な樹種である(伊東ほか2011)。柿田遺跡の以前の調査で出土した杭には、マツ属複雑管束亜属やアカガシ亜属、クリなどの多様な針葉樹や広葉樹が利用されている(伊東・山田編2012)。

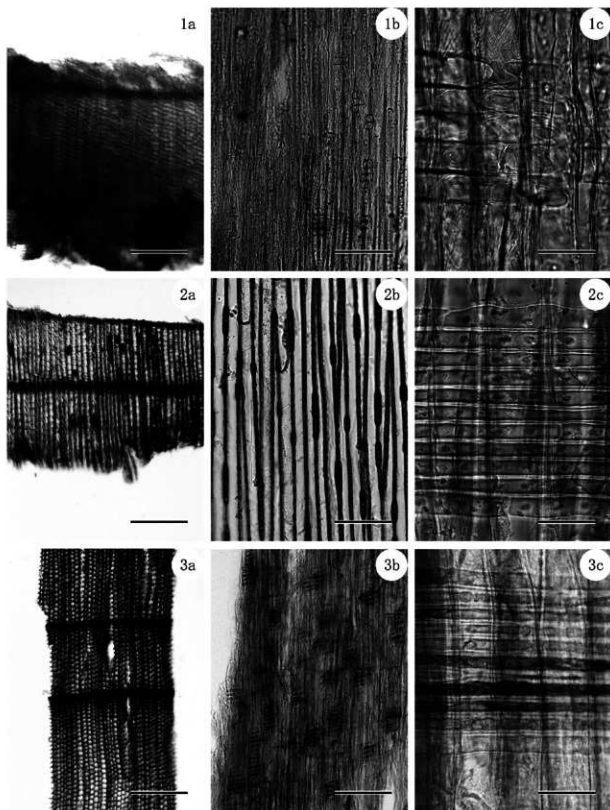
樫は、アカガシ亜属であった。アカガシ亜属はとても堅硬な樹種である(伊東ほか2011)。柿田遺跡の以前の調査で出土した樫にはアカガシ亜属とアスナロが利用されており(伊東・山田編2012)、傾向は一致する。

板材はサワラ、木製品はヒノキ科であった。サワラおよびヒノキ科は真つすぐに生育する加工性の良い樹種である(伊東・山田編2012)。柿田遺跡の以前の調査で出土した板にはヒノキやアスナロ、サワラといったヒノキ科の木材が多くみられ、傾向は一致する。

割材は、クリであった。遺跡周辺に生育していた堅硬なクリを伐採利用していた可能性がある。

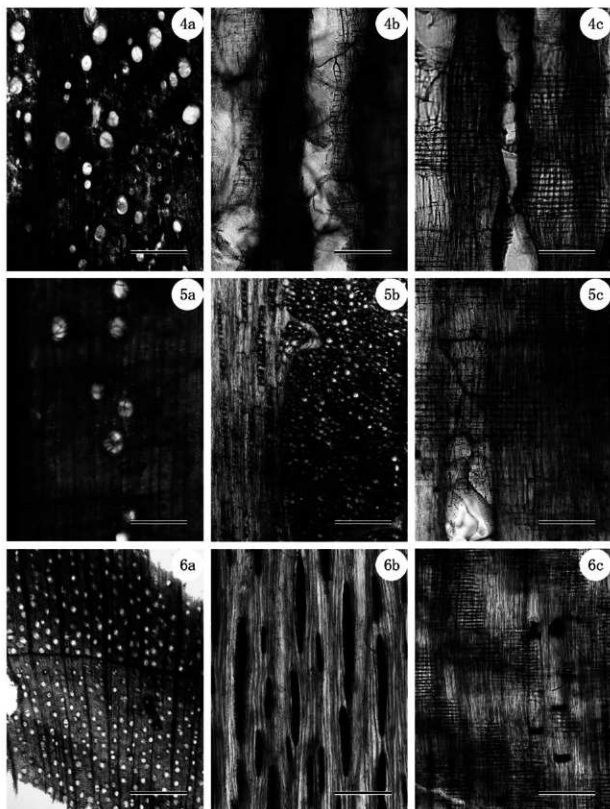
【引用文献】

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和徳 2011『日本有用樹木誌』238p 海青社
伊東隆夫・山田昌久編 2012『木の考古学—出土木製品用材データベース—』449p 海青社



1a-1c, コウヤマキ(図15-8) 2a-2c, サワラ(図41-59) 3a-3c, ヒノキ科(図24-34)
 a:横断面(スケール=500 μm) b:接線断面(スケール=200 μm) c:放射断面(スケール=50 μm)

図 54 木製品・木材の光学顕微鏡写真(1)



4a-4c, クリ (図8-8) 5a-5c, コナラ属アカガシ亜属 (図8-4) 6a-6c, カエデ属 (図41-60)
 a: 横断面 (スケール=500 μm) b: 接線断面 (スケール=200 μm) c: 放射断面 (スケール=200 μm)

図 55 木製品・木材の光学顕微鏡写真 (2)

第2節 柿田西遺跡出土の大型植物遺体

バンダリ スタルジャン・佐々木由香 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

岐阜県可児市柿田に所在する柿田西遺跡は、可児川により形成された沖積平野上、および遺跡の南側に展開する浅間丘陵地の扇状地上に立地する。縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。ここでは、自然流路などから出土した大型植物遺体の同定を行い、当時の利用植物について検討した。

2. 試料と方法

試料は、T-8 (NR1) から1試料 (No. 1)、T-9 (NR1) から1試料 (No. 2)、T-16 (SD1) から1試料 (No. 3)、T-31 (SD1) から1試料 (No. 4)、T-34 (SX1) から3試料 (No. 6・7・8)、T-28 (遺構外) から1試料 (No. 5) である。T-8 (NR1) の時期は近世以降、T-16・T-31 (SD1) の時期は古墳時代前期と考えられている。

同定は、肉眼および実体顕微鏡で行った。堅果類の大きさについては、デジタルノギスで計測した。モモとオニグルミは、さらに、完形 (一部焦痕を含む)、動物食痕、打撃痕、半割に分類した。

3. 結果

同定の結果、木本植物で広葉樹のモモ核とオニグルミ核、トチノキ果実・種子、エゴノキ核の4分類群が得られた。表2に同定結果を示す。

表2 大型植物遺体 (括弧内は破片数)

| No. | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
|--------|-------------|------|------|--------|------|------|-----|-----|
| | T-8 | T-9 | T-16 | T-31 | T-28 | T-34 | | |
| トレンチ名 | NR1 | NR1 | SD1 | SD1 | - | SK1 | | |
| 遺構堆積層名 | 13層 | 14層 | 12層 | 7層 | 10層 | 7層 | 7層 | 14層 |
| 分類群 | 時期 | 近世以降 | 不明 | 古墳時代前期 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 |
| モモ | 核 (完形) | | 7 | 1 | | | | |
| | 核 (完形、一部焦痕) | | 2 | | | | | |
| | 核 (動物食痕) | | 2 | | | | | |
| | 核 (半割) | | | (5) | | | | |
| オニグルミ | 核 (完形) | 1 | | | | 1 | | |
| | 核 (動物食痕) | | | | | | | 1 |
| | 核 (打撃痕) | | | | | | (1) | (3) |
| | 核 (半割) | | (1) | | | | | |
| トチノキ | 果実 | | | | | | 1 | |
| | 種子 | | | | | | 1 | |
| エゴノキ | 核 | | | | 7 | | | |

(括弧内は破片数)

以下に、産出した大型植物遺体について、遺構およびトレンチ別に記載する。

T-8 (NR1) : オニグルミ (完形) が1点得られた。

T-9 (NR1) : オニグルミ (半割) が1点得られた。

T-16、T-31 (SD1) : モモが少量 (完形10 (一部焦痕2を含む)、動物食痕2、半割5) 得られた。

T-28 : エゴノキ (完形) が7点得られた。

T-34 (SX1) : オニグルミが6点 (完形1、動物食痕1、打撃痕4) とトチノキが2点得られた。

次に、得られた主要な分類群の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は『学名インデックス (YList)』(米倉・梶田2003)に準拠し、APGⅢリストの順とした。

(1) モモ *Amygdalus persica* L. 核 バラ科

黄褐色～茶褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形～紡錘形で、先が尖る。下端に大きな着点がある。表面には不規則な深い皺があり、片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。計測可能な8点の大きさは、高さ19.2～22.5(平均20.7±1.1)mm、幅16.0～20.1(平均17.9±1.2)mm、厚さ13.5～15.5(平均14.4±0.8)mm(表3)。

(2) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var.

sachalinensis (Komatsu) Kitam. 核 クルミ科

茶褐色で、側面観は卵形～広卵形。木質で、壁は厚くて硬く、ときどき空隙がある。表面に縦方向の浅い縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。断面は角が尖るものが多い。内部は二室に分かれる。完形個体の大きさは、高さ34.5mm、幅27.6mm、厚さ25.2mm(図56-5)、動物食痕を有する個体の大きさは、残存高27.1mm、残存幅21.3mm、厚さ24.6mm(図56-6)、打撃痕を有する個体の大きさは、残存高31.3mm、幅25.0mm、残存厚12.7mm(図56-7、半割の大きさは、高さ28.1mm、幅25.0mm、残存厚12.7mm(図56-8))。

(3) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 果実・種子 ムクロジ科

果実は黒色で、完形ならば上面観はいびつな円形、側面観は円形～倒卵形。表面はざらつく。成熟果では表面に皮目状の斑点が明瞭にある。3片に分かれる構造で、その単位で破片になりやすい。壁は厚く、やや弾力があるが、柔らかい。高さ33.2mm、残存幅33.4mm(図56-9)。種子は、下半部が暗褐色で光沢がなく、上半部は黒褐色で光沢がややある。ゆがんだ楕円形。上下の境目の下に、少し突出した着点がある。種皮は薄く、やや硬い。種皮表面には指紋状の微細模様が密にある。高さ25.8mm、幅32.5mm、厚さ30.9mm(図56-10)。

(4) エゴノキ *Styrax japonicus* Sieb. et Zucc. 核 エゴノキ科

黒色で、上面観は円形、側面観は卵形。下端に大きな着点がある。頂部から縦方向に3本の浅い溝がある。表面には細かい網目模様があり、壁は厚く硬い。長さ9.2mm、幅6.4mm(図56-11)。

4. 考察

柿田西道跡の調査において肉眼で確認され、取り上げられた種実を同定した結果、木本植物を中心とした種実が確認された。種実のほとんどは食用可能な種実であった。栽培植物ではモモが得られた。また、野生植物で食用可能な種実として、オニグルミとトチノキが見出された。このほかにエゴノキが得られた。

モモ核は、古墳時代前期の遺構とされているT-16・31(SD1)から得られた。山梨県内の遺跡から出土したモモ核の事例を集めた『遺跡から出土するモモ核について』(新津1999)によると、モモの核は時代ごとに大きさや形状が変化しており、弥生時代には核長の平均が2.46～2.65cm、幅が2.05～2.33cmと比較的大きくかつ丸味が強い核が多いのに対し、平安時代から近世には縦長になる傾向があるという。さらに、奈良・平安時代の核長は2.36～2.66cm、幅が1.88～1.98cmで、戦国時代には核長2.30～2.55cm、幅1.75～1.89cm、江戸時代後期になると大型になり、平均核長

表3 モモ核の大きさ(単位:mm)

| No. | 長さ | 幅 | 厚さ |
|------|------|------|------|
| 3 | 20.5 | 18.0 | 14.2 |
| | 20.4 | 18.4 | 15.1 |
| | 20.1 | 17.1 | 14.0 |
| | 21.7 | 18.6 | 15.2 |
| | 19.2 | 16.0 | 13.6 |
| | 19.9 | 17.5 | 14.1 |
| | 21.6 | 17.2 | 13.5 |
| 4 | 22.5 | 20.1 | 15.5 |
| 最小 | 19.2 | 16.0 | 13.5 |
| 最大 | 22.5 | 20.1 | 15.5 |
| 平均 | 20.7 | 17.9 | 14.4 |
| 標準偏差 | 1.1 | 1.2 | 0.8 |

2.69cm、最大で3.8cm程度の核がみられるとしている。柿田西遺跡から出土した今回のモモ核は、古墳時代前期か中世以降のモモ核の可能性があったが、平均が核長 2.07 ± 0.11 cmで、最大でも高さ2.25cm、幅が 17.9 ± 1.2 mmであった。形状は丸みを帯びる形が多かったため、古墳時代前期か中世以降のモモ核の可能性が高い。また、小清水は、核長の平均から、栽培モモは2.9cm程度、ノモモは2.1cm程度、コダイモモは1.9cm程度と分類しており、栽培モモが大型で長く扁平であるのに対して、コダイモモは小型で球状を呈するとしている（小清水1962）。T-16・31（SD1）のモモ核の大きさは、栽培モモとノモモの間の大きさで、形状は長めのタイプと球状に近いタイプがみられた。モモは食用のほか、祭祀に伴って自然流路に堆積した可能性もある。モモはネズミ類による動物食痕のある個体と完形、半割の個体が得られており、完形には一部焦痕をもつ個体も含まれていた。

近世の遺構とされているT-8（NR1）からは完形のオニグルミが1点得られた。時期不明の遺構とされているT-9（NR1）、T-34（SX1）からはオニグルミとトチノキが得られた。T-9（NR1）から出土したオニグルミは半割が1点（図56-8）、T-34（SX1）から出土したオニグルミは完形が1点（図56-5）と、動物食痕のある個体が1点（図56-6）、石器などによる打撃痕をもつ個体が4点みられた。動物食痕は、ネズミ類によるものとみられる。打撃痕は、内部の子葉を食用するために割った痕跡である（図56-7）。このため、人間による加工の残滓がT-16・31（SD1）に堆積したと考えられる。トチノキは果実が1点（図56-9）、種子が1点（図56-10）みられた。食用可能な堅果類であるが、食用にならない果実も出土しており、T-16・31（SD1）の周辺に生育していた木から、自然の営力で落下して堆積した可能性がある。

T-28では遺構外からは、エゴノキが出土した。林縁など、陽の当たるところを好む落葉中高木のエゴノキが遺跡周辺に生育していたと推定される。エゴノキの果皮はサポニンを含んでおり、果実を叩いて魚毒や石鹼として用いられた民俗事例があるが（長沢2001）、出土したエゴノキは全て完形個体であったため、利用されたどうかは不明である。

【引用文献】

- 小清水卓二 1962「古代日本の住居から出土する桃核について」榎原考古学研究所編『近畿古文化論叢』559-568
吉川弘文館
長沢 武 2001『植物民俗』335p 法政大学出版局
新津 健 1999「遺跡から出土するモモ核について—山梨県内の事例から—」『山梨県考古学論集 IV』361-374
山梨県考古学協会
米倉浩司・梶田 忠 2003 BG Plants 和名-学名インデックス (YList) <http://ylist.info>



1. モモ核完形 (T-31(SD1)、No. 4) 2. モモ核完形、一部焦痕を含む (T-16(SD1)、No. 3)
 3. モモ核動物食痕 (T-16(SD1)、No. 3) 4. モモ核半割 (T-16(SD1)、No. 3)
 5. オニグルミ核完形 (T-34(SX1)、No. 6) 6. オニグルミ核動物食痕 (T-34(SX1)、No. 8)
 7. オニグルミ核打撃痕 (T-34(SX1)、No. 8) 8. オニグルミ核半割 (T-9、No. 2)
 9. トチノキ果実 (T-34(SX1)、No. 7) 10. トチノキ種子 (T-34(SX1)、No. 7)
 11. エゴノキ核 (T-28、No. 5)

図 56 大型植物遺体

第5章 総括

柿田西遺跡の調査では、弥生時代後期～古墳時代前期の土坑や溝、自然流路が17基、古墳時代中期～後期の溝が4基、中世以降の自然流路及び溝が4基、近世以降の溝や土坑が2基、時期不明のSX及びNR、水田面など38基の遺構が検出された。図57は検出された遺構をトレンチ内に落としたが、全体を表すために規模の小さな遺構（SA及びSP）については図示していない。今回の調査はトレンチ掘削のみで調査面積は狭小であり、トレンチ内では暗渠を残して調査を行ったため、制約がある中での調査となった。また、水が湧いたため底まで掘削できなかつた溝があった他、乾燥によりトレンチの壁が崩れたりするなど十分な調査が行えているわけではない。そのため、平面では確認できていない遺構や遺物が検出できないことからSXとなっている遺構の他、自然流路や溝と判断した遺構でも更なる近隣の調査により性格が変わるものも多くあると想定される。その中で、調査成果から、自然流路と中世以降の遺構を除いた時期が分かる遺構から柿田西遺跡を点在する範囲でA～G地点とした。

遺構の時期から柿田西遺跡は概ね三時期に分けることができ、柿田遺跡と比較して記述する。

第1期

T-4・5・10・16・19・20・28・31・33で遺構が検出され、柿田西遺跡の各地点において広く展開する。時期は弥生時代後期～古墳時代前期であり、柿田遺跡のⅡ～Ⅲ期にあたる。T-10では5本以上の自然木を積み上げて構築したと思われる水制遺構が検出された他、T-16では幅約6.23mと大きな溝が検出され、この時期の遺物が多く出土している。流木とともに堆積土の中から建築部材と思われる木製品も出土している。第1期のT-10では自然木を積みあげた水制遺構と思われるものが検出されていることから、検出された流木も上流で水制遺構として利用されていたものの可能性も考えられる。T-19では残存幅約5.1mの大きな溝が検出され、T-20では水制遺構を伴った溝が検出される。T-28からは農具とともに水制遺構の構成材が出土している。A地点ではその東側で同時期の竪穴住居が検出されているため、近隣で住居跡が検出される可能性がある。弥生時代中期～後期の遺物が見られるT-16・28・33では近隣での永続的な居住も想定される。

柿田遺跡や顔戸南遺跡、柿田月田遺跡でも同時期の遺物や水制遺構等の遺構が見られることから関連性が伺え、特に第1期では広範囲にわたる集落であったことが考えられる。

第2期

T-6・8で遺構が検出され、柿田遺跡に近い位置で展開する。時期は古墳時代中期～後期であり、柿田遺跡のⅣ期にあたる。T-8では溝に伴う護岸施設が検出され、水制遺構の構成材と考えられる木杭が出土している。

この時期は第1期に比べ広い範囲に見られず、北東側に偏りが見られる。柿田遺跡では掘立柱建物、竪穴住居跡、水制遺構が比較的近い位置で検出されているため、関連性が伺える。

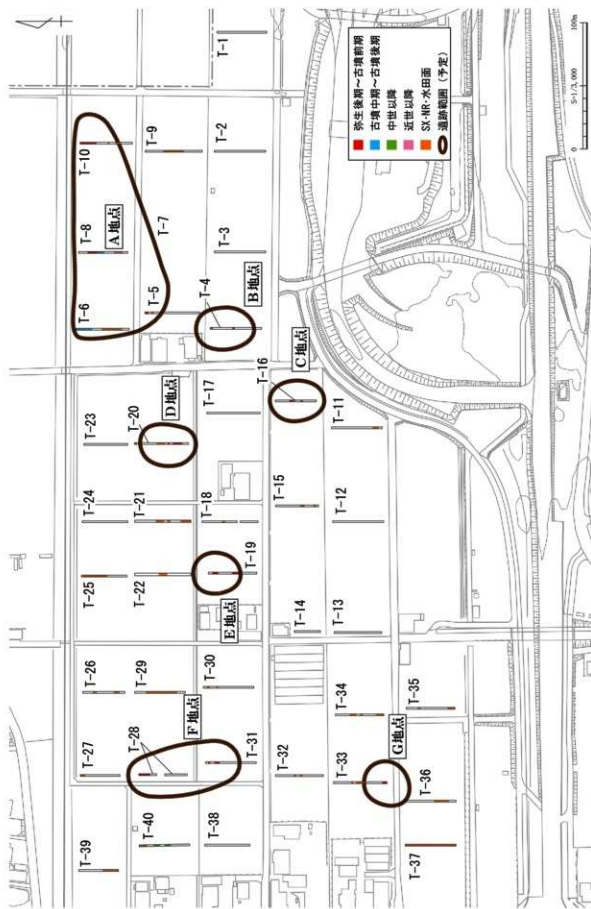


図 57 調査から判明した遺跡の範囲

第3期

中世以降の時期の遺構がT-4・39・40、近世以降の時期の遺構がT-8・30で検出され、柿田遺跡のVI～VIII期にあたる。いずれもトレンチ内から出た小破片で時期を想定しており、不確かな部分もあるため今回の遺跡の範囲としては地点の中に入れていない。

今回の調査では、遺物では縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、山茶碗、近世陶器などのほか櫛や建築部材、水制遺構に利用されたと想定される流木などの木製品、堅果類など多様な遺物が検出された。遺構では溝や自然流路が検出されたが、居住域は未検出である。溝や自然流路は概ね北東から南西、または東から西へ流れ、柿田遺跡のように溝や自然流路に挟まれた場所に居住域が展開することが想定される。第1期では広い範囲で遺跡が見られ、第2期になると遺跡の範囲が狭くなっていく様子が見られる。また、検出されなかった古代の時期の遺構や第3期とした中世、近世の時期は遺構の検出も少なく様相については不明である。

今回の調査ではトレンチ間の距離が遠いため、柿田西遺跡A～G地点のそれぞれの地点の関連性や全体の概要が掴めておらず、各地点においては居住域が未検出であり、明らかになっていない部分は多い。また、T-1～3では遺構は検出されていないが、調査区の東側では第1期～2期の遺構が検出されていることから、東側では広い範囲で遺跡の展開も想定される。

今後の調査により各地点及び東に展開する柿田遺跡との関連性、未検出である居住域を明らかにすることが課題である。

【引用・参考文献】

- 愛知県史編さん委員会 2015 『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投系』愛知県
財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1990 『廻間遺跡』
各務原市教育委員会 1984 『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』各務原市教育委員会
可見市 2005 『可見市史 第一巻 通史編』
可見町教育委員会 1976 『可見町神崎山古墳発掘調査報告書』
可見町教育委員会 1977 『粘り塚古墳発掘調査報告書』
岐阜県教育委員会 2004 『岐阜県中世城館跡総合調査報告書第3集 可茂地区・東濃地区』
岐阜県教育文化財団文化保護センター 2005 『柿田遺跡』
小林行雄・杉原荘介編 1989 『弥生式土器集成』東京堂出版
財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 2009 『朝日遺跡Ⅷ』
財団法人岐阜県文化財団文化財保護センター 2005 『柿田遺跡』
東海考古学フォーラム 1996 『鍋と壺 そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム尾張大会
可見市教育委員会 2014 『柿田遺跡(道の駅地点)・ほうの木古窯跡』
可見町教育委員会 1973 『可見町杉ヶ洞古墳発掘報告書』
(財)岐阜県文化財保護センター 2003 『金ヶ崎遺跡・青木横穴墓』
可見市教育委員会 2009 『柿田月田遺跡・清水経塚古墳』
可見市教育委員会 2009 『柿田遺跡馬乗洞地点』
御嵩町史編さん室 1992 『御嵩町史』御嵩町
可見市教育委員会 2006 『瀬田泉元古墳』



T-1 トレンチ土層断面 (北西から)



T-2 トレンチ土層断面 (北西から)



T-3 トレンチ土層断面 (北西から)



T-4 SK 1 遺物出土状況 (西から)



T-5 SP 1 遺物出土状況 (西から)



T-6 SD 1 土層断面 (西から)



T-8 SD 1 遺物出土状況 (北西から)



T-8 SD 1 完掘状況 (北西から)



T-9 NR 1 遺物出土状況 (南西から)



T-10 SD 1 遺物出土状況 (北西から)



T-10 SD 1 遺物出土状況 (北東から)



T-10 SX 1 完掘状況 (西から)



T-11 SX 1 土層断面 (西から)



T-12 トレンチ土層断面 (北西から)



T-13 トレンチ土層断面 (南西から)



T-14 トレンチ土層断面 (南西から)



T-15 SX 1土層断面 (西から)



T-16 SD 1遺物出土状況 (南東から)



T-16 SD 2遺物出土状況 (北西から)



T-16 SD 2遺物出土状況 (南東から)



T-18 SX 1土層断面 (西から)



T-19 SD 1土層断面 (西から)



T-19 SD 2土層断面 (西から)



T-20 SD 1土層断面 (西から)

図版 4



T-20 SW 1土層断面 (西から)



T-20 SX 1土層断面 (西から)



T-21 SW 1・NR 1土層断面 (西から)



T-21 SX 2土層断面 (西から)



T-23 トレンチ土層断面 (南西から)



T-24 トレンチ土層断面 (南西から)



T-25 トレンチ土層断面 (南西から)



T-26 トレンチ土層断面 (西から)



T-26 SX 2土層断面 (西から)



T-27 SX 1土層断面 (西から)



T-28 SD 1遺物出土状況 (北西から)



T-29 トレンチ土層断面 (北西から)



T-30 SD 1土層断面 (西から)



T-31 SD 2完掘状況 (西から)



T-33 SD 1土層断面 (西から)



T-33 SX 1土層断面 (西から)



T-34 SX 1土層断面 (西から)



T-35 SX 1土層断面 (南西から)



T-36 SA 1土層断面 (西から)



T-36 SW 1土層断面 (西から)



T-37 SX 1土層断面 (西から)



T-38 トレンチ土層断面 (南西から)



T-39 NR 1土層断面 (南西から)



T-40 SD 1土層断面 (西から)



出土遺物 1



出土遺物 2

報 告 書 抄 録

| ふりがな | かきだにしいせきはつくつちょうさほうこくしょ | | | | | | | | |
|-------------------|---|-----------------|---|-------|--|-------------|-----------------------------------|------------------------|--------------|
| 書名 | 柿田西遺跡発掘調査報告書 | | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 可見市埋文調査報告 | | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 54 | | | | | | | | |
| 編著者名 | 長江真和・濱村友美・山崎貴之・鈴木英美 | | | | | | | | |
| 編集・発行機関 | 可見市教育委員会 | | | | | | | | |
| 所在地 | 〒509-0292 岐阜県可見市広見一丁目1番地 TEL 0574-62-1111 | | | | | | | | |
| 編集機関 | 株式会社イビソク | | | | | | | | |
| 所在地 | 〒503-0854 岐阜県大垣市築捨町3丁目102番地 TEL 0584-89-5507 | | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2019 (平成 31) 年 3 月 15 日 | | | | | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 地点 | コード | | 北緯 ° ′ ″ | 東経 ° ′ ″ | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| | | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| かきだにしいせき 柿田西遺跡 | ぎふけん 岐阜県 かきだに 可見市 あきだちのなか 柿田地内 | A | 21214 | 11960 | 35° 25′ 48″ | 137° 6′ 3″ | 2017. 10. 25 ~ 2018. 02. 23 | 1,560m ² | 土地区画 整理事業 |
| | | B | 21214 | 11961 | 35° 25′ 46″ | 137° 6′ 0″ | | | |
| | | C | 21214 | 11962 | 35° 25′ 44″ | 137° 5′ 58″ | | | |
| | | D | 21214 | 11963 | 35° 25′ 47″ | 137° 5′ 56″ | | | |
| | | E | 21214 | 11964 | 35° 25′ 46″ | 137° 5′ 52″ | | | |
| | | F | 21214 | 11965 | 35° 25′ 47″ | 137° 5′ 46″ | | | |
| | | G | 21214 | 11966 | 35° 25′ 42″ | 137° 5′ 46″ | | | |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 柿田西遺跡 | 集落跡 | 縄文時代 ~ 近代 | 水田跡・溝・ 自然流路・ 水制遺構・ 土坑・ピット・ 不明遺構 | | 縄文土器・ 弥生土器 土師器・須恵器・ 山茶碗・ 灰釉陶器・陶器・ 木製品など | | 縄文時代～近代 までの複合遺跡 | | |
| 要約 | <p>今回の試掘調査では、調査区内に約1m×40mのトレンチを39地点に設定し、遺跡の有無及び範囲を確認した。その結果、縄文時代から近代にかけての遺物を確認した。</p> <p>遺構は、溝や自然流路、ピット等を中心とする。また、検出した自然流路等の一部に、水制遺構を伴う状況を確認した。流路底面からは、水制遺構の構成材とみられる木製品や、土器が多量に出土した。</p> <p>トレンチによる部分的な調査ではあるが、上記の時代の遺構が一定数存在することが判明した。</p> | | | | | | | | |

柿田西遺跡発掘調査報告書

平成31年3月15日 印刷

平成31年3月15日 発行

編集・発行 可児市教育委員会

〒509-0292

岐阜県可児市広見一丁目1番地

℡ 0574-62-1111 Fax 0574-63-6751

株式会社イビソク

〒503-0854

岐阜県大垣市築捨町3丁目102番地

℡ 0584-89-5507 Fax 0584-89-5901

印刷 富士出版印刷株式会社